

德所熊  
禮之重譯

法情理

第八冊卷三十一

24059

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

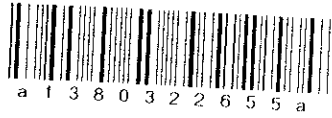
登錄部	第	號
社會科學部		
法律學部		
總記	款	議書項
H		
全	18冊	內容18冊
分類部	第	320.8號

校學等師範福岡

門 14

18冊 / 內容 18

T1A1  
23  
Ka11ba



福岡教育大学蔵書

# 萬法精理

孟德斯鳩著

何禮之重譯

明治九年

一月刻成

何氏藏版

## 萬法精理第十八冊目次

卷之卅一 立君國ノ沿革ニ關涉セル佛朗克人ノ封

建制ノ原理

第一回 官職封田及ヒ廷宰職ノ變遷

第二回 民政ノ改革

第三回 廷宰職ノ威權

第四回 廷宰職ニ就キ國民ノ初意ヲ論ス

第五回 廷宰ニ兵權ノ歸セル所以

第六回 第一朝ノ諸王威權ヲ失セル第二期

第七回 廷宰職ノ執權間ノ大臣及ヒ封田制ヲ論

第八回 私有地ノ封田ト變セシ所以

第九回 寺院ノ領地ヲ封田ニ變更シタル所以

第十回 僧侶ノ富

第十一回 チヤールス、マルテルノ執柄中歐洲ノ

形勢

第十二回 什一税ノ設立

第十三回 教正長老ノ選法ヲ論ス

第十四回 チヤールス、マルテルノ封建制ヲ論ス

第十五回 同上

第十六回 王權ト廷宰職ト混一セシテ○第二朝

ノ王室

第十七回 第二朝ノ諸王ヲ選舉セル細目

第十八回 甲列曼帝

第十九回 同上

第二十回 路易王第一世

第二十一回 同上

第二十二回 同上

第二十三回 同上

第二十四回 自主民ニ封田ヲ受領セシノタル事

第二十五回 第二朝王室ノ陵夷セル原因、私有地ノ

變更

第二十六回 封田變更

第廿七回 其他封田ノ變更

第廿八回 佛國ノ大吏及ヒ諸封田ノ變遷

第廿九回 禿王甲列即位以來ノ諸封田ノ性質ヲ論ス

第三十回 同上

第卅一回 甲列曼家ノ帝業他家ニ移リシ所以

第卅二回 佛國ノ王冠、ヒュー、カベット家ニ移リシ所以

第卅三回 封田世襲ノ映響

第卅四回 同上

萬法精理卷之三十一

何禮之譯

立君國ノ沿革ニ關涉セル佛朗克人ノ封建制ノ原理

第一回 官職封田及ヒ廷宰職ノ變遷

州牧ノ任期ハ最初一年ニ限リタリシカ遂ニ朝廷ニ賄  
囑シテ數年ノ間延期スルヲ許サレタリ格羅味王以  
後ニ初メテ其例アルヲ見ル當時アゼールノ州牧ニペ  
オニユスナル者アリ其子モムモルスニ命シテ金銀ヲ  
賚ラシ之ヲゴントラム王ニ獻シテ任期ヲ續クヲ請

求セシメケレハ其子ハ果シテ父ノ職ヲ襲フヲ得タ  
リ時既ニ朝綱解弛シテ諸王ハ更ニ名器濫用ノ弊ヲ慮  
ラサレハナリ

國法ニ據レハ封田ヲ賜與スルハ固ト君主ノ隨意ニ出  
ツト雖氏實際ニ於テハ絶テ一朝ノ喜怒ヲ以テ之ヲ與  
奪セサル而已ナラス一般ニ之ヲ國會ニ於テ討論決定  
スヘキ一大重事ト爲セリ然レ氏賄賂公行綱紀解弛ス  
ルニ及テハ百事皆ナ敗類セサルハ無キヲ以テ封田ノ  
受領モ州牧ノ任期ニ於ルカ如ク金銀ヲ用井テ買得ス  
ルニ至レリ

此ノ一卷ニ於テ別ニ世襲ノ封田アルヲ明示ス可シ

時トシテ君主ノ特命ニ依リテ賜與スルモノヲ除ク即

チブル子チルド后シクベルト王ノ時ニ當リ舊賜ノ封

田ヲ追収スルノ廟議ニ決シケレハ之カ爲ノニ人心沸  
騰シテ忽チ一國ノ大亂ヲ釀成シ衆忿皆ナ后ノ一身ニ  
萃マリテ終ニ敵人ノ毒手ニ罹レリ

ブル子チルドハ王家ノ公主ニシテ爲人英邁男子ニ愧  
チサルノ才略アリテ政務ニ鍊達シ今尚ホ遺蹟ノ觀ル  
可キモノアリ且數人ノ兄弟アリ數人ノ子アリ皆ナ續  
テ王位ヲ踐メリ然ルニ一朝暗弱ナル國王ノ俘虜ト爲  
リテ未曾有ノ慘死ヲ致シタルハ實ニ意外ノ事ト謂ハ  
サルヲ得ス是レ國民ノ公憤ヲ招クヘキ特別ノ原因ア

ルニ非サルヨリハ何ソ俄カニ此極ニ到ランヤコロタ  
 リユス王カ該妃ノ罪ヲ數フルニ曾テ十王ヲ弑スルノ  
 大逆ヲ以テセシハ全ク羅織ノ言ニシテ二王ハ自裁シ  
 テ死シ其他諸王ノ死ハ或ハ偶然ニ出テ或ハ奸惡ナル  
 王妃ノ謀ニ成レリ國民モ亦タ彼ノ暴惡更ニブル子チ  
 ルトニ劣ラサルフレデゴシダカ首領ヲ全クシテ病褥  
 ニ没スルヲ許シテ其ノ罪惡ヲ罰スルニ忍ヒサル程ナ  
 レバブル子チルドノ虐殺ニ至テモ亦タ敢テ熱腸ヨリ  
 出テシニハ非サルヘシ  
 行刑ノ日ニ至リテブル子チルドヲ駱駝ニ載セテ軍兵  
 ノ前ヲ過キ行凌辱ヲ加ヘタルヲ見レハ其ノ兵士ノ不

平ヲ招キタル原因アルヲ知ル可シフレデ井ガリユス  
 ノ説ニ據レハブル子チルドノ寵臣ゾロタリユスハ專  
 ラ聚斂ヲ務メ侯伯ノ封田ヲ奪フテ官帑ヲ充實シ貴族  
 ヲ侮慢シテ苟クモ己カ意ニ適セサレハ官爵ヲ保タシ  
 ノス終ニ兵士ノ怒ヲ惹テ陣營ノ中ニ刺殺セラレタリ  
 而ノ人心日ニブル子チルドヲ離レテ良死ヲ得サルニ  
 至リシハ寵臣ノ爲メニ報復ヲ圖リシカ故ニ出ルカ或  
 ハ過ヲ改ハルニ吝ナルニ依リテカ必ス其ノ一二居ル  
 可シ

コロタリユスノ素志ハ一人ニテ全國ヲ掌握スルニ在  
 リ加フルニブル子チルドニハ宿恨アリテ固ト釋ク可

キニ非サレハ若シ威權該妃ノ子ニ歸スルキハ我カ不利ニシテ滅亡ヲ俟ツノ外アラサルヲ慮リテ遂ニブル子チルドノ罪ヲ鳴シテ無比ノ殘虐ヲ行フニ至レリブル子チルドニ反逆ヲ企テタル主謀ハワルナカリユスナリ當時ワルナカリユスハ不爾艮ノ州尹タルヲ以テコロタリユスヲ要シテソノ在位ノ間ハ決シテ其職ヲ奪ハサル旨ヲ約諾セシメテ先ツ己ノ地位ヲ固メ而メ他ノ諸侯伯ニ於ルカ如ク王權ヲ以テ自由ニ封田ヲ與奪セシメサルヲ得タリ

ブル子チルドノ攝政中ニ國民ノ忿怒ヲ招クヘキ情勢ニ及ヒシハ實ニ不幸ト謂フヘキナリ抑モ法律ノ弛張

朝廷ニアリテ其ノ作用ヲ錯ラサル間ハ信賞必罰封田ノ與奪ニ就キ絶テ一人ノ怨言ヲ吐クモノ無シト雖モ政綱一タヒ紊レテ受封ノ典徒ラニ罷臣ノ貪婪ヲ濟ケ或ハ苞苴ノ報酬ト爲ルニ及テハ原ト不正ヲ以テ之ヲ得ルト雖モ苟クモ之ヲ奪フニ正道ニ由ラサレハ心ニ不平ヲ懷クヲ免レス但シブル子チルドカ封田ヲ沒收シタル主意ハ或ハ公利ノ一點ニ注目シテ然ルナル可シト雖モ更ニ之ヲ明言スルヲ無ク其ノ口實トスル所ハ唯タ事物ノ秩序ヲ振肅スルニ在リテ而モ其ノ實ヲ顧ミレハ賄賂公行ノ弊ヲ助長スルニ過キス公帑ヲ消耗スルカ爲メニ度支ノ權ヲ擴張シ封田賜與ノ大典モ

全ク勲勞ヲ賞シ忠義ヲ獎勵スルノ作用ヲ失セリ之ヲ要スルニブル子ナルドハ其ノ主意固ト正シカラスシテ舊來ノ弊風ヲ矯正セント欲シ加フルニ智略ニ頗ル富タルヲ以テ遂ニ貴族權官ノ危懼ヲ來シテ躬ヲ滅亡ノ禍ヲ招ケリ

今日ニ在リテ當時ノ治法ヲ記セル文書ハ固ヨリ見ル可ラス偶マ二三ノ時事ヲ論スルアリト雖氏文運未開ノ當時ナレハ見識卑隘ニシテ恰モ今日農夫野人ノ政談ヲ聽クカ如シ其中稍々信ヲ置クニ足ルモノハ獨リコロタリユスカ巴梨府ノ會議ヲ以テ頒布セル弊風改革ノ制誥アルノミ此ノ制誥ノ頒布ニ依リテ該王ハ殆

ト社稷ヲ顛覆セント欲スル人民ノ不平ヲ慰撫シ且ツ諸封臣ニ向テ決シテ先王ヨリ所賜ノ封田ニ干涉セサル旨ヲ保証スルノミナラス從來退奪シタルモノヲモ返付スヘキ旨ヲ約定セリ

右會議ニ於テ國王ノ准允セル條件ハ前記ノ一項ニ止ラス凡ソ僧侶ノ特准ニ抵觸スヘキ法制ハ自今一切之ヲ停止ス可シト公告シ而ノ後夕教正ノ黥陟ヲ公撰ニ委子テ幾分カ朝廷ノ干涉ヲ除キセンシユスノ新稅ヲ廢シゴントロム、シグベルト、チルペリツク諸王ノ没後即チフレデゴング、ブル子ナルト二妃ノ攝政ノ際ニ定メタル人頭稅ヲ停メテ大ニ財政ノ面目ヲ改正シ且牲



畜ヲ人民ノ私有地ニ放テ游牧ヲ恣ニスルヲ禁制ス  
ル等新政ノ福利ヲ一般ノ民事ニマテ推シ及ホセリ

第二回 民政ノ改革

從來國民ハ君主ヲ撰立シ或ハ其ノ施設ノ良否ニ就テ  
深ク謀慮ヲ費セシメ無ク唯タ一時ノ事情ニ應シテ周  
旋シ自ラ紛議ヲ解キ自ラ和睦ヲ計ルニ過キサリシカ  
民智漸ク長進スルニ從テ曾テ前例ナキ事ヲモ企圖ス  
ルヲト爲リテ各人カ享用スル所ノ公限ニ着目シ虐心  
平氣ヲ以テ法律ヲ檢考シテ其ノ缺典ヲ補綴シ暴虐ノ  
政令ニ抵抗シテ王權ノ過重ナルヲ節制セリ

國民ハフレデゴングブル子チルト二妃ノ攝政中ニ施

設セル暴虐ニ更ニ驚ク氣色無ク却テ益々抵抗ノ精神  
ヲ現セリフレデゴングハ故ラニ暴政ヲ數キ以テ已カ  
毒殺暗刺等ノ殘忍ナル惡行ヲ掩匿セント欲シテ愈々  
其ノ罪跡世ニ明カナリシカ其ノ暴虐ハ婉子一身ノ  
惡德ニ係リテ公衆ノ安寧ニ影響スルヲ甚ナシ故ニ二  
人ノ行狀ヲ形容スレハフレデゴングハ一個ノ惡婆ニ  
過キサレハブル子チルドハ國民ヲ壓制スヘキ圭角ヲ  
露シ而モ當時恰モ民政頹敗ノ極ニ達シタルヲ以テ國  
民ハ斯ヲ機會トシテ獨リ封建ノ惡弊ヲ匡正スルヲ以  
テ足レリトセヌ更ニ進テ民政ヲモ安固ナラシメント  
決心シタリ蓋シ民政ノ頹敗ハ多ク舊染ノ惡弊ニ屬シ

テ而モ法律ニ於ルヨリモ更ニ風俗ニ密着スルカ故  
ニ一層ノ險難ヲ覺ヘタレハナリ

グレゴリーノ史記ヲ閱スレハ下ニハ粗野頑陋ノ國民  
アリ上ニハ暴虐殘刻ノ君主アリ隨テ一國ノ人氣甚ク  
兇惡ニシテ輒モスレハ騷亂ヲ醸シ易キヲ以テ在上者  
ハ勢ヒ壓制ノ術ヲ用井テ鎮靜ヲ圖ラサル可ラス時ア  
リテ基督ノ教義能ク獲得ナル風俗ヲ温和ナラシムル  
「アリト雖モ此ハ是レ偶然ノ作用ニシテ一時冥罰ヲ  
恐ル、ノ心ヲ發セシムル時ト及ヒ教會ノ方便ニ依リ  
テ神聖ノ靈妙ニ感化セラル、キニ於テノミ然リトス  
之ヲ要スルニ諸王ハ唯タ眼前ノ神罰ヲ懼ル、ニ由リ

敢テ聖物褻瀆ノ罪ヲ犯サレモ神罰立トコロ  
ニ到ラスト思フハ或ハ一朝ノ忿怒ニ乘シ或ハ熟  
慮ノ上ニテ甚寒心ス可キ慘酷ノ行ヲ爲スモ更ニ忌憚  
セス實ニ佛朗克人ハ前ニ論ゼシ如ク氣質甚ク殘酷ナ  
ルカ故ニ暴君虐主ノ治ニ堪忍シテ撓ムヲナシ其ノ性  
情愛憎常ナク且多欲ナルヲ以テ政令正シカラス專ラ  
培克ヲ務メテ毫モ恐怖スルヲ無シ佛國ニハ固ヨリ制  
定ノ法律多クアリト雖モ國王ハ「ブレゼント」稱マル  
一紙ノ令狀ヲ出シテ忽チ之ヲ停止スルヲ通例ト爲ス  
右令狀ハ稍々羅馬諸帝ノ「レスクリプト」ニ類似セリ我  
々諸王ハ若シ羅馬ノ例習ヲ模倣セシニ非サレハ必ス

自擅ニ之ヲ作爲セシナル可シダレゾリノ史記ニ佛國諸王カ無罪ナル人ヲ虐殺シ或ハ罪ノ有無ヲ審問セス告發スル者アレハ直ニ死刑ヲ施シ或ハ非法ノ婚姻ヲ免許シ承襲ノ順序ヲ紊リ親族ノ權理ヲ褫奪シ神仕ノ童女ヲ犯ス等極ノテ殘酷ノ諸惡行アルヲ歷然記載セリ其實諸王ハ立法ノ全權ヲ握ラサレ凡法律ノ執行ヲ停止スルノ勢力アリ

クロタリユスノ憲法ニ由リテ此等ノ諸惡政ヲ洗滌シテ向後ハ何人ニ拘ラス預シノ罪ノ有無ヲ審ニセサレハ罰典ニ處ス可ラス兼襲權ハ法律所定ノ順序ニ從テ親族人ニ付與ス可ク教門ニ入ル女子ヲ娶ルヲ許ス

令狀ヲ廢止シテ無效ノモノト爲シ之ヲ得テ之ヲ使用シタル者ヲ嚴罰ニ處シタリ若シ今日ニ至ルマテ右憲法ノ第十三條ヨリ第十五條ノ明文ヲ遺失セザランニハ該王カ嚴ニ此ノ如キ無法ノ令狀ヲ制止シタルヲ知リ得ベケレ凡惜哉其ノ存スル所ハ僅ニ第十三條冒頭ノ數語ニシテ諸令狀ヲ遵守ス可キ旨ヲ記セルノミ此ノ諸令狀トハ新定ノ憲法ヲ以テ禁止シタル中ニ屬セザルモノナルベシ其他該王制定ノ憲法ニ亦タ諸令狀ノ獎害ヲ改正スルモノアリ

バルジユスカ右憲法ニ制定ノ年月ナク又頒布ノ地名ヲ記セサルヲ以テクロタリユス第一世ノ制定ナリト

斷定セシハ一理ナキニ非サレ氏予ハ下文ニ論スル三  
條ノ理由アルニ依リテ之ヲクロタリユス第二世ニ属  
スルモノトス

第一 右憲法ニ國王タル者ハ須ラク父祖ヨリ寺院ニ  
賜與シタル特准ヲ佑護スベシトアリ抑モクロタリユ  
ス第一世ノ祖父ナルチル德里ツクハ曾テ基督教ニ歸  
依シタルヲ無ク其ノ死去ノ日ハ未タ王國ノ建設ノ前  
ニ在リ然ラハ何ノ緣故アリテ特准ヲ寺院ニ賜與シタ  
ルヤ疑フ可キノ一ナリ故ニ若シ右憲法ヲクロタリユ  
ス第二世ノ制定ト爲スハ其ノ祖父ハ則チクロタリ  
ユス第一世ニシテ該王ハ故ラニ命ヲ下シテ其子クラ

ムシヲ妻子ト併セテ焚殺セシカハ其ノ罪ヲ贖ハント  
欲シテ寺院ニ巨萬ノ財ヲ寄附シタルヲアリ更ニ事實  
ノ符合スルヲ見ル可シ

第二 右憲法ヲ以テ矯正セシ所ノ弊害ハクロタリユ  
ス第一世ノ没後ニ至テモ尚ホ未タ洗滌ノ效ヲ奏セサ  
ル而已ナラズダントラムノ暗弱、チルベリツクノ暴政  
及ヒフレダクンダ、ブル子チルドニ妃ノ攝政中ニ最高  
ノ點ニ達シタリト然ラハ則チ國民ハ數世ノ間黙々ト  
シテ忍フ可ラサルノ暴虐ヲ忍テ一回モ其ノ疾苦ヲ訴  
ヘシヲ無シト思フカ又國民ハ後ニチル德里ツク第二  
世ニ向テ從來ノ惡弊ヲ縷述シ朝廷ニ迫リテ裁判法ニ

關係スル法律習慣ヲ都テ古制ノ如ク遵行セシメタル  
ト全様ノ舉動ニ出スト思フカ予ハ敢テ之ヲ信セサル  
ナリ

第三 右憲法ハ元來國民ノ疾苦ヲ救フカ爲メニ制定  
スル所ナレハクロタリユス第一世ノ如キ民間ニ怨嗟  
ノ聲ナク君權確立シテ令行禁止ノ治世ニ在リト思フ  
可ラス之ニ及シテクロタリユス第二世ハ適國政變革  
ノ秋ニ際スレハ之ヲ該王ノ治世ト看做ステ更ニ能ク  
事實ニ符合スルニ若カサルナリ凡ソ史乘ノ事ヲ解ス  
ルニハ宜シク當時ノ法律ヲ考究ス可ク法律ヲ解釋ス  
ルニハ須ラク當時ノ史乘ニ據ラサル可ラス二者相俟

テ考証ノ實ヲ得ルモノナリ

### 第三回 廷宰職ノ威權

曩ニクロタリユス第二世ガワルナカリユースニ終身  
廷宰職ニ居テ渝ラザル旨ヲ約定セシヲ記セリ是レ  
國政上ニ他ノ影響ヲ生スベキ一改革ト謂サルヲ得ス  
何トナレハ從前ノ廷宰職ハ王室ノ一官吏ニ過キサレ  
凡是ヨリ人民公選ノモノト爲リテ國王之ヲ自由ニ黜  
陟スルノ權ナシ改革前ニハテオドリツク王ハゾロタ  
リユスヲ舉テ廷宰ニ任シフレテゴング妃ハフンデリ  
ツクヲ舉テ廷宰ニ任シタレ凡嗣後ハ總テ人民ノ選舉  
ニ出テタレハナリ

然ルヲ以テ嗣後人民公撰ノ廷宰職ヲ以テブル子チル  
 ドノ生前ニ於ル王室ノ廷宰ト同視ス可ラス且不爾垠  
 人ノ法制ニ於テモ其ノ廷宰職ハ固ヨリ國家ノ顯官ニ  
 アラス又佛國第一朝諸王ノ時ニ在リテモ未タ極位ノ  
 者ニ非サリシナリ

シロタリユスハ其ノ政略能ク官職封田ヲ受領スル者  
 ノ心ヲ安堵セシメ而メフルナカリユスノ死去ニ際シ  
 トロイニ集會セル貴族ニ向テ該人ニ代リテ廷宰職ニ  
 補スヘキ人物ヲ問ヒケレハ僉ナ答ヘテ全ク陛下ノ慈  
 惠ニ頼ル可シ更ニ一人ノ選舉スヘキナシト謂ヘリ  
 グゴバルトハ能ク父ノ遺志ヲ繼テ全國一統ノ大業ヲ

成就シタルヲ以テ國民ハ深ク信服シテ別ニ廷宰職ヲ  
 選任セサリケレハ該王ハ國政皆ナ意ノ如クナルヲ見  
 ルヨリ戰勝ノ勢ニ誇リ專擅ノ心ヲ生シテ再ヒブル子  
 チルドノ先蹤ヲ學ヒタレハ復舊ノ事行ハレスオース  
 トラシヤノ封臣ハスクラゴオニヤ人ノ侵攻ニ任セテ  
 カヲ防禦ニ盡サス悉ク郷土ニ歸リ去ルヲ以テオース  
 トラシヤノ邊境ハ夷狄ノ蹂躪スル所ト爲レリ  
 於是ダゴバルトハ形勢已ヲ得サルヨリ決心シテオー  
 ストラシヤノ政權ヲ其ノ國民ニ還付シ該州郡ノ財貨  
 ヲ其ノ子シギバルトニ賜與シ而シテコロオンノ教正  
 クニバルトトアダルギシユス侯トニ王國及ヒ朝廷ノ

治權ヲ委任シタリフレデカリユスノ記録ニハ詳カニ  
當時盟約ノ條目ヲ記サ、レ氏該王カ准許狀ヲ以テ諸  
件ヲ確定シ而メオーストラシヤカ忽チ夷狄ノ掠奪ヲ  
免レタルハ疑フ可ラス

ダコベルト自ラ死期ノ迫ルヲ知リテイーガーニ顧命  
シテ其ノ妃子ントチルダスト其ノ子クロフイスノ輔  
佐ヲ委托シニウストリア及び不爾根ノ封臣ハ幼君即  
チクロフ井スヲ選デ國王ト爲シイーガー及び子ント  
チルジスノ二人ニテ朝廷ノ政權ヲ總攬シ都テダダバ  
ルトノ裨政ヲ改革シケレハニウストリア人不爾根人  
ノ疾苦ヲ訴フ者一時跡ヲ絶ジテ遂ニオーストラシヤ

ノ如キ平和ノ治ヲ致セリ

イーガーノ死後子ントチルダス妃ハ不爾根ノ貴族ノ  
會シテフロアチヤトスヲ廷宰職ニ選任セシメフロア  
チヤトスハ書ヲ不爾根國ノ諸教正諸侯伯ニ贈リテ在  
職中即チ畢生ノ間其ノ營警爵位ヲ保護スベキ旨ヲ約  
諾シ加フルニ誓詞ヲ以テ之ヲ証明シタリ是レ廷宰職  
ノ紀傳ヲ著セル記者カ以テ王國ノ萬機ヲ捻裁セル  
ヲ大書スル所ノ紀元ナリ  
フレデカリユスノ記者ハ原ト不爾根ノ産ナルヲ以テ右  
改革ノ時ニ於テ不爾根ノ廷宰職ヲ記述スル一過ガニ  
オーストラシヤハニウストリアノ者ニ於ルヨリモ詳カ

ナリ然レモ不爾垠ノ會盟ハ固ヨリニウストリヤ、オーストラシヤノモノト大同小異ニシテ更ニ抵牾スル所ナシ

之ヲ要スルニ國民ノ思想ハ蓋シ一國ノ政權ヲ舉テ之ヲ威權赫々タル世襲ノ君王ニ掌握セシメシヨリハ寧ロ自ラ選舉シテ自ラ約定ヲ要シ得ベキ廷宰職ニ委託スルノ更ニ安全ナルニ如カスト爲セリ

第四回 廷宰職ニ就キ國民ノ初意ヲ論ス

立君世襲ノ國ニシテ人民ヨリ更ニ一人ヲ撰舉シテ君權ヲ執行セシムルノ政体アルハ實ニ奇異ノ觀ヲ爲サ、ルヲ得スト雖モ當時ノ事情如何ニ拘ラズ佛朗克人

ノ此舉ニ出ナシハ全ク深遠ナル淵源アリテ然ルヲ看破ス可シ

佛朗克人ハ日耳曼人ノ後裔ナリ多西土ハ日耳曼人ヲ評シテ該人種ハ王ヲ選ブニ貴冑ヲ以テシ將帥ヲ選フニ剛勇ヲ以テ決スト言ヘリ此言ヲ聞テ始メテ佛國第一朝ノ諸王ト廷宰職ト并立セル所以ヲ知ルヘシ即チ貴冑ノ故ヲ以テ王位ヲ世襲ニシ剛勇ノ故ヲ以テ廷宰職ヲ公選セシナリ

内ハ能ク國會ノ輿論ヲ籠絡シ外ハ國中ノ豪傑ヲ率井テ遠略ヲ務メ武威ヲ輝カスガ如キ英明ノ君主ニ至テハ廷宰ノ權ト王室ノ權トヲ一身ニ兼有セシハ更ニ



疑フ可キニアラス如是君主ハ國中無二ノ門地ニ生ス  
ルニ因テ王位ヲ踐ミ加フルニ英雄ノ資アリテ能ク三  
軍ヲ指揮スルヲ以テ遂ニ廷宰職ノ權ヲモ収攬セリ即  
チ第一朝ノ諸王ノ如キハ國君タルノ尊位ニ依リテ司  
法院國會ヲ總裁シ國民ノ兼諾ヲ得テ法律ヲ議定シ將  
帥タルノ權ヲ以テ閫外ノ事ヲ掌トリテ三軍ヲ節制セ  
リ

此事ニ就テ佛朗克人ノ初意ヲ曉ラント欲セハ須ラク  
アルゴバステスノゴアレnciaン帝ニ於ル往事ヲ  
鑒ミテ知ル可シ該帝一タヒ佛朗克人ナルアルゴバス  
トスニ兵權ヲ授ケシヨリ帝室ノ權柄ハ忽チ全人ノ手

ニ移リテ恰モ權臣ノ爲メニ囚虜トナリテ宮中ニ幽閉  
セラレ一切ハ政務ニ關與スルヲ能ハサリキ羅馬ノア  
ルゴノストスノ行爲ハ後世佛國百賓家ノ爲ノニ始メ  
テ備ヲ作ルモノナリ

第五回 廷宰ニ兵權ノ歸セル所以

諸王親ラ三軍ヲ指揮シタル間ハ國民更ニ元帥ヲ選任  
スルノ念ヲ生セス格羅味及ヒ其ノ四子ハ皆ナ國民ヲ  
帥テ連戰連勝ノ武勲ヲ立タリテオドベルトノ嗣王  
テオバルトニ至テ幼弱多病ナルカ爲ノニ閫外ノ事ヲ  
舉テ他人ニ委托セリ是レ兵權王室ヲ去ルノ濫觴ナリ  
該王ハ馬ヲ伊太利ニ出シテナルシースヲ征伐スルヲ

ヲ肯セサルニ由リテ國人ハ憂憤ノ餘自ラ二人ノ統領  
ヲ選ミテ征討ノ將帥ト爲セリクロタリユス第一世ノ  
四子中殊ニゴントラムハ兵事ヲ好マス自餘ノ諸王モ  
僉ナ之ニ倣フテ鞍馬ノ勞ヲ厭ヒシカ故ニ國民ハ兵權  
ノ一人ニ歸センコトヲ慮リテ特ニ數人ノ統領ニ之ヲ分  
任セシメタリ

是ニ由テ生スル所ノ弊害ハ實ニ枚舉ニ遑アラズ節制  
一々ビ解テヨリ三軍ニ紀律ナク一人ノ号令ヲ聽従ス  
ルモノナク軍團ハ徒ニ我國ヲ擾亂スルノ兇器ト爲リ  
足未タ敵地ヲ蹈マスシテ既ニ人民ノ物貨ヲ掠奪スル  
ニ至レリダレゴリノ史記ニ備サニ其ノ患ヲ形容セ

リ即チゴントラムノ言ヲ舉テ吾人ハ何ノ術ニ由リテ  
以テ捷ヲ獲可キカ如何ナレハ吾人ハ我が父祖ノ得タ  
ル版圖ヲ維持シ能ハザルカ我國民ハ既ニ一變シテ昔  
日ノ國民ニ非ハト謂ヘリ纔カニ格羅味王ノ孫ニ至テ  
此言ヲ發スルトハ何ソ衰頹ニ赴クノ斯ク速カナルヤ  
是故ニ國民ハ當時ノ形勢已ヲ得サルヨリ終ニ一人ノ  
統領ヲ撰テ兵權ヲ執ラシムルニ決定シ此統領ニ當  
時已カ義務ヲ忘レタル數多ノ封臣ヲ統轄シ軍律ヲ肅  
定シ以テ私闘ニ狃レタル國民ヲ治ムヘキ全權ヲ委任  
セリ乃チ廷宰職是レナリ  
廷宰ノ職掌ハ原ト王家ノ内政ノミヲ管理セシガ漸ク

外廷ノ官吏ト共ニ封田ニ係ル政務ニ干預シ終ニハ之ヲ與奪スル全權ヲ占領シ而ノ亦タ兵政ヲ兼掌シテ三軍ヲ指揮スルニ至レリ既ニ封田ノ政務ヲ掌トレハ兵權ヲ執ラザルヲ得ザルハ自然ノ勢ナリ蓋シ當時ノ形勢軍兵ヲ指揮スルハ容易ナレバ之ヲ徵募スルハ頗ル艱難ナリシカ故ニ平日恩典ヲ施スベキ人ニ非サルヨリハ決シテ徵募ニ應スルモノヲ得可ラス又武勇ヲ尚ト不羈ノ心甚タ熾ナル國民ヲ統御スルニハ強迫シテ命ニ從ハシムルヨリハ寧口之ヲ勸誘スルノ得策タルニ若カス封臣死シテ空田アルハ之ヲ他人ニ讓與スバキ契約ヲ爲スノ得策タルニ若カス且常ニ賞賜ヲ厚

クシテ民心ヲ感激セシメ以テ競フテ兵役ニ就カシムルノ得策タルニ若カス是レ朝政ヲ撻裁スル人ハ復タ元帥ヲモ兼帶セサル可ラサルノ理由ナリ

第六回 第一朝ノ諸王威權ヲ失セル第二期

ブル子チルドノ死後ヨリ廷宰職ノ威權漸ク盛ニシテ人臣ノ極位ニ立テ萬機ヲ撻裁シ而モ兵權ヲ掌トルト雖氏常ニ國王躬ヲ元帥ト爲リテ廷宰及ビ國民ヲ指揮シタリ然ルニ百賓ノ威權一タヒテオドリツク王及ビ其ノ廷宰職ヲ凌轢シテ以來諸王ハ徒ニ虚器ヲ擁シテ宮中ニ幽居シ續テチャールス、マルテルカチルベリツク王及ビ其ノ廷宰フインフロイヲ弁髦視スルニ至テ

一國ノ實權愈々該家ノ專有ニ歸セリ蓋シオーストラ  
シヤ家ノ權威再ヒニウストリヤ及ヒ不爾根ヲ壓倒シ  
テヨリオーストラシヤノ廷宰職ハ恰モ百賓家ノ世襲  
ト爲リ威勢赫奕國中一人ノ肩ヲ比フル者ナキニ至レ  
リ百賓或ハ當世ニ名望ヲ繫クモノアリテ國王ヲ奇貨  
トシ之ヲ擁シテ國亂ヲ釀サンヲ恐ル、ヨリ君主ヲ  
宮禁ノ中ニ幽閉シテ一身ノ進退ヲ檢束シ僅カニ一年  
ニ一タビ外廷ニ出テ臣民ノ謁見ヲ許セリ但シ國王ハ  
法例ヲ制定スルノ名アレバ廷宰ヨリ進呈スル稿案ヲ  
批准スルニ過キス又外國ノ使節ニ接スル時アレバ其  
ノ應答ハ皆テ廷宰代リテ之ヲ勤メタリ是レ即チ歴史

家ノ所謂王室凌夷廷宰跋扈ノ世ナリ

佛國人民カ心ヲ百賓家ニ寄スルノ深キハ百賓ノ諸孫  
中ヨリ故ヲニ髣髴ヲ選ミ廷宰職ヲ襲ハシメテダゴベ  
ルト王ノ上ニ置ケルヲ見テ知ル可シ所謂虚器ヲ以テ  
虚器ニ臨ムモノナリ

第七回 廷宰職ノ執權間ノ大臣及ヒ封田制ヲ

論ス

百賓ハ巧ニ貴族ノ心ヲ籠絡シ其ノ擁護ノ力ニ頼リテ  
廷宰職ノ位地ヲ固守シ權柄一タヒ全家ニ歸シテ以來  
世襲替ラス而ノ貴族翊戴ノ功ニ酬ヒンカ爲メ大臣顯  
官ヲシテ概テ身ヲ終ルマテ官位ヲ保タシメシカ曰ヲ

經ルニ從テ一般ノ習慣ヲ成シ終ニ益々確定シテ動力  
サルコト爲レリ

此時勢ヨリ封田ノ制遂ニ一變シテ世襲ノモノト爲ル  
是レ封田ノ制ニ就テ審カニ考究スヘキモノナリ

アンデリノ盟約ニ於テゴントラム王及ビ其ノ猶子チ

ルデベルト王ハ父祖諸王ヨリ封臣及ビ寺院ニ賜フ所

ノモノヲ保存スベシト約定シ而メ王妃王母王女ハ何

等ノ資産ニ拘ラス都テ遺言ヲ以テ度支院ヨリ受領ス

ル所ノモノヲ隨意ニ處分スルコトヲ許サレタリ

マルキユルフスノ成例彙集ハ廷宰執權ノ時ニ編輯セ  
ルモノナリ右成例中ニ諸王ヨリ某人及ビ其ノ相續人

ニ贈賜アリシコトヲ記セリ而ノ此成例ハ人ノ行爲ヲ証  
示スルモノナレハ既ニ第一朝ノ季世ニ在リテ封田ノ  
一部ハ世襲ノ所有タリシコトヲ知ルニ足レリ但シ當時  
未タ讓與ス可ラサル采地ノ法アルヲ識ラス此ノ法制  
ハ近世ノ發明ニ係リテ諸王ハ實際上ニ於テモ理論上  
ニ於テモ絶テ之ヲ施行セシコト無シ

是言ノ証據トシテ茲ニ確當ナル事實ヲ明示スベシ讀  
者若シ兵士ニ給與セル采地既ニ烏有ニ歸シ又之ヲ扶  
持スヘキ資金全ク罄キタル時代ヲ史上ニ發見スルヲ  
得バ則チ以テ田來ノ米地ハ既ニ彼此相授受シテ原主  
ノ所有ニ非スト爲シテ可ナリ而メ其ノ之ヲ發見スヘ

キ時代トハ乃チチャールス、マルテルカ封田ノ新制ヲ  
創立スル時ニシテ於是新舊ノ封田ニ精密ナル區域ヲ  
立テサル可ラス

朝政紊亂スルニ依リテ或ハ賄賂ノ爲ノニ賜與スル所  
アリ或ハ憲法上ニ於テ褒賞ヲ行ハサルヲ得スシテ國  
王ヨリ世襲ノ恩典ヲ賜フ時ニハ當時ノ情勢、候伯ノ實  
爵ヲ與ヘスシテ先ツ若干ノ封田ヲ與ヘテ世襲ノ基業  
ト爲サシメタリ是レ若干ノ土地ヲ削ルハ王室ニ於テ  
甚タ患フルニ足ラザレハ一タヒ大臣黜陟ノ權ヲ棄ル  
ハ自ラ朝廷ノ式微ヲ招クニ異ナラザレハナリ

第八回 私有地ノ封田ト變セシ所以

私有地一變シテ封田ト爲リシヲハマルキユルフスノ  
成例中ニ載スルカ如ク初ノ地主ヨリ所有地ヲ國王ニ  
贈呈シ國王ハ右贈呈者ニ所入得有ノ權或ハ封田ノ名  
目ヲ與ヘテ之ヲ相續人ニ兼襲セシメタリ

斯ノ如ク土地ヲ私有スル人ノ心ヲ誘フテ地性變換ノ  
念ヲ生セシメタルハ全ク貴族カ受用セル古來ノ特准  
ニ垂延スルニ由レリ佛國貴族ノ特准ハ一千餘年ノ間  
幾多ノ艱難ニ堪ヘ國家ノ爲メニ肝腦地ニ塗レテ受得  
セシ所ノモノナリ

封田受領者ノ利益極メテ鮮ナカラス損害要償ノ金額  
モ平民ニ比スレハ倍徙ノ差アリマルキユルフスノ成

例ニ據レハ何人ニ拘ラズ封田ノ領主ヲ殺ス者ハ償金六百「ス」ヲ納メサル可ラス此特准ハ撒律人里布利人ノ法律ニ據リテ制定スル所ニシテ平民ニ至テハ撒律法ニ服従スル佛朗克人或ハ夷民ハ僅ニ二百「ス」ニ羅馬人ナレハ一百「ス」ノ償金ヲ得ルニ過キス王室ニ直隸セル封臣ノ受用スル特准ハ蓋シ要償金ノ項ニ止マラス凡ソ訟庭ノ召喚ヲ受テ出頭セス或ハ法官ノ命ニ従ハザルモノハ國王ノ法院ニ上告セラレ然モ尚ホ我意ヲ主張シテ屈セサレハ則チ王家ノ保護ヲ剥奪セラレテ何人モ之ヲ容留ス可ラザル而已ナラズ一片ノ食ヲモ與フヲ聽サレス此時ニ當リテ其ノ人

平民ノ籍ニ在レハ家財ヲ没収セラルヘシト雖モ封臣ナレハ之ヲ免ル可ク又平民ニテ我意ヲ主張シテ官命ニ服セサレバ乃チ之ヲ以テ有罪ト認ムレモ封臣ハ否ラズ平民ハ輕罪ヲ犯スニモ熱湯審法ヲ受ケサル可クサレモ封臣ハ特リ人命ノ訟獄ニ於テノミ此審法ヲ受ク可ク又封臣ヲシテ訟廷ニ於テ他ノ封臣ノ罪狀ヲ誓言セシム可ラス其ノ特准ハ日ニ月ニ擴張シテ已マス又カルロマンノ成例ニハ封臣ノ榮譽ヲ保護スルカ爲メニ封臣ハ親ラ誓言セス唯タ從士ノ口ヲ以テ之ヲ爲スノミト記セリ又封臣ノ爵位ヲ有スル者若シ軍役ヲ怠タルモハ右急役ノ日數ニ照シテ酒肉ヲ用ウルヲ

禁止スルニ過ギザレ平民ニシテ州牧ノ出馬ニ隨從セサル者ハ六十ス一ノ罰金ヲ徵取セラレ之ヲ納付スル迄ハ一定ノ苦役ニ所セラル、ヲ免レス

是故ニ封臣ノ列ニ入ラザル佛朗克人殊ニ羅馬人ノ如キハ皆ナ争フテ封臣ノ名義ヲ賜ラン、ヲ願ヒ我カ基業ノ安全ヲ謀ランガ爲メニ私有地ヲ一旦國王ニ贈呈シ然ル後更ニ封田トナシテ之ヲ受領シ相續人ニ兼襲セシムルノ慣習ト爲レリ實ニ時勢適當ノ考案ナリ此ノ慣習續テ流行シ第二朝ノ亂世ニ及テハ各人皆ナ身家ノ保護ヲ托スヘキ者ヲ求ムルカ故ニ自餘ノ貴族ト聯合シ彼此相助ケ恰モ一個ノ封建政ヲ組織シタレハ殊ニ私

有地ノ變換多キヲ加ヘタルモ亦タ怯シムニ足ラス此慣例ハ數多ノ免許狀ニ於テ着ルカ如ク人民其ノ私有地ヲ國王ニ贈呈シ而シテ再ヒ之ヲ收回シ或ハ初ニ之ヲ私有地ト公言シ然ル後チ封田ノ認許ヲ得シト否トヲ問ハス第三朝ノ治世ニ至ルマデ續テ流行シ之ヲ收回ノ封田ト稱セリ

平民ハ漸ク封田ヲ所有スルヲ好ムト雖近世ノ所入得有權ニ於ルカ如クニ該土地ヲ管理スルヲ以テ封田ヲ受領スル人ニシテ苟クモ心ヲ經濟ニ留ムル者ハ此限ニアラス是レ佛國ニテ賢明ノ稱アル甲列曼帝ヲシテ私有地ノ爲メニ封田制ノ紊亂ヲ防クベキ許多ノ



規則ヲ定メシメタル所以ナリ其証據ハ該帝ノ世ニ於  
テ借有地ノ封田ハ大抵終身ヲ期限トシテ所有シタルカ  
故ニ人心自ラ借有地ヨリモ更ニ私有地ニ傾向セリト  
雖氏其ノ平民タランヨリハ寧ロ王室ノ臣隸タラン  
ヲ希望セシハ無論ナリ  
甲列曼帝ノ法例中ニ或地ノ人民カ其ノ所有財産タル  
借有地ヲ一旦上納シテ再ヒ名目ヲ換テ之ヲ収回スル  
ノ惡弊タルヲ痛言スレ氏人民ハ敢テ實産ノ所有ヲ  
好マスシテ却テ所入ノ得有權ノミヲ好ムト言フニ非  
ズ唯タ封田ハ之ヲ相續人ニ傳フヘク且數多ノ利益附  
着スルカ故ニ人民カ自ラ私有地ヲ封田ニ變更セシ  
テ

ヲ記載スルノミ

第九回 寺院ノ領地ヲ封田ニ變更シタル所以  
王田ハ獨リ國王之ヲ賞賜ノ用ニ供シ以テ一方ニ於テ  
ハ國人ヲ鼓舞シテ遠略外征ニ從事セシノ一方ニ於テ  
ハ之レニ因テ轉タ王田ヲ増殖スルノ國資ト爲ス是レ  
一國人民ノ精神ナリ然ルニ時世推移スルニ從テ用法  
ノ趣意一變シテ徒ラニ寺院ノ贈賜ニ供シ既ニ格羅味  
ノ孫チルベリツク王政ヲ聽ク時ニ及テハ一切ノ土地  
殆ド寺院ノ所有ニ屬スルヲ浩歎スルモノ、如シ其言  
ニ曰ク教門ハ日ニ富盛ニシテ王室ノ度支ハ匱乏ヲ告  
ケタリ僧侶ハ榮華ヲ極メテ殆ト君權ヲ蚕食セリ嗚呼

國家ノ權柄ハ既ニ僧侶ノ把持スル所ト爲レリ  
是レ乃チ歷代ノ廷宰職カ貴族ノ富ヲ節制スル能ハサ  
ルヨリ遂ニ寺院ノ基業ニ着手シタル所以ナリ是レ乃  
チ百賓ガニウストリヤ征伐ノ名義中ニ僧侶ノ請願ニ  
依リテ寺院ノ基業ヲ褫奪セル暴政ヲ匡正ス可シト揚  
言シタル所以ナリ

オーストラシヤノ廷宰職即チ百賓家ハ歷代僧侶ヲ遇  
スル一甚ク優渥ニシテニウストリヤ不爾根ノ比ニア  
ラサルハ史乘中ニ僧侶カ噴々トシテソノ敬神ノ意厚  
ク慈善ノ心深キヲ讚嘆スルヲ看テ明カナリ故ニ百賓  
家自ラ寺院中ノ首座ヲ占メタレハチルベリク王ハ

已ニ鴉群ニ入レハ敢テ他鴉ノ眼ヲ扶セズト謂ヘリ按  
賓家既ニ教門中ノ人トナレハ敢テ王室  
ニ左祖シテ僧侶ヲ檢束セスト云フ意乎

百賓ニウストリヤ不爾根ノ二國ヲ征代シテ其ノ國王  
廷宰ヲ滅シタル口實ハ首トシテ僧侶ノ冤屈ヲ救フニ  
在ルヲ以テ若シ成功ノ上ニテ寺院ノ基業ヲ奪フキハ  
言行反對ノ譏ヲ招キ忽チ信ヲ國民ニ失フヲ免レス加  
フルニ一舉シテ二大國ヲ征略シ敵人悉ク滅亡シタル  
ヲ以テ諸將校ノ意ヲ満足セシムルニ充分ノ土地ヲ得  
タレハ更ニ寺院ノ基業ヲ剥奪セスシテ止ノリ  
百賓ハ僧侶ヲ保護シ而ノ亦タ其ノ擁戴ノカニ依リテ  
王國ノ主宰ト爲リタレ氏嗣子チャールスマルテルニ

至テハ僧侶ヲ招克セガレハ其ノ權威ヲ維持スヘキ資  
本ヲ仰ク所無シ蓋シマルテ爾續テ國政ヲ掌トルニ方  
リテ王田ハ大抵終身若クハ世襲ノ約ヲ以テ貴族ノ受  
領スル所ト爲リ寺院ハ貧富ノ淨財ヲ収メテ許多ノ私  
有地ヲ占領スルヲ省破スルカ故ニ先ツ僧侶ノ基業  
ヲ剥奪スルヲ決定シテ寺領寺院ヲ併セ取リテ以テ  
王室及ヒ官吏ノ用途ニ供セリ之ヲ喻フルニ恰モ劇病  
ヲ治ムルニ劇藥ヲ投スルカ如クナレハ容易ニ效用ヲ  
得タリ

#### 第十回 僧侶ノ富

僧侶ノ贈賜逐年相増シ三朝ノ王室ニテ之ニ寄附シタ

ルモノヲ通計スルハ王國ノ全土ヲ舉テモ尚ホ足ラ  
サルカ如キ巨額ニ至レリ總シテ上王侯貴人ヨリ下庶  
民ニ至ルマテ交々我カ所有ノ土地ヲ僧侶ニ贈賜スル  
ノ風俗ヲ成スト雖氏亦タ新タニ一個ノ事情ヲ生シテ  
之ヲ収復スルノ方便ト爲レリ蓋シ第一朝ノ諸王ハ深  
ク教門ニ歸依シテ許多ノ寺院ヲ建立シタレ氏一國尚  
武ノ氣象ニ克ツ能ハス後ニハ其ノ寺領ト爲ルモノ  
ヲ取テ之ヲ兵卒ニ賜與シテ子孫ニ分配セシメ之ニ依  
リテ大ニ僧侶ノ富ヲ減シテ過重ノ勢ヲ防ケリ第二朝  
ニ至テ歷世ノ諸王ヨリ許多ノ施財ヲ得テ再ヒ寺院ノ  
富盛ヲ致シタレ氏後ニ那曼人ノ入冠アリテ到ル處悉

ク奪掠毀壞ノ災ヲ免カレス就中僧侶ヲ指シテ以テ嚮  
ニ該蕃民ノ教門ニ属スル偶像ヲ破壊シタルト及ヒ  
甲列曼帝ノ武畧ニ依リテ北方ニ追竄サレタルトノ主  
謀ト爲シ其ノ寺院ヲ破却シ其ノ什物ヲ掠奪スル等暴  
虐ヲ肆ニシテ一時ニ宿世ノ憤ヲ洩ラシ尔来四五十年  
ヲ經テモ復讎ノ心尚ホ解ケ僧侶ヲ凌虐スルノ舉動  
斷エス其ノ損害ハ實ニ名状ス可ラサリキ然レモ僧侶  
ハ之ニ抵抗スルノカアルトナシ擾亂漸ク治マリ第三  
朝ノ諸王敬神ノ意ヲ表スルニ及テ衰廢ヲ再興シ新タ  
ニ土地ヲ求メタレモ時勢昔日ニ全シカラス人情正ニ  
開進ニ趣キ僧侶ニ大望ヲ懷クモノアリテ名利ヲ營ミ

權威ヲ張ラントスレハ民間ニモ人物ヲ生シテ輒スク籠絡ノ  
計ニ陷ラス若シ信者アリテ臨終ニ土地ヲ寺院ニ贈與  
スルモノアレハ再ヒ之ヲ民間ニ回復スルノ方便ヲ造  
爲スルカ故ニ僧侶絶エス諍論ヲ生ジ互ニ軋轢シテ和  
セズ然レモ濁世ノ常トシテ腕力ニ頼ラサレハ以テ自  
立スル能ハサルヨリ僧侶ハ終ニ貴族ノ庇蔭ヲ請求セサ  
ルヲ得ス貴族ハ僧侶ノ委托ヲ受テ一時力ヲ保護ニ盡  
シタレモ久シカラステ再ヒ人民ニ左袒シテ之ヲ凌  
虐スルト前ノ如シ  
第三朝ノ政治ハ第一朝第二朝ニ比スレハ謨猷頗ル宜  
シキヲ得テ太平ノ時稍久シキヲ以テ僧侶ハ其ノ所有

ヲ増殖スヘキ機ヲ得タレ其際ニ亦タカルブイン宗徒勃興シテ寺院ノ財貨ヲ掠奪シ金銀ノ神器ヲ改鑄シ兇焰甚タ猖獗ニシテ僧侶ハ一身ノ安全ヲモ保チ能ハサレハ基業ノ減削ヲ顧ミルニ暇アラス理非ヲ口舌ニ争フ間ニ保存スル所ノ古文書ハ悉ク宗徒ノ爲メ一炬ニ付セラレテ灰燼ト爲リ而モ貴族ノ状態ヲ觀レハ昔南ノ榮華ニ反對シテ零落ヲ極ノ既ニ我カ所有ヲモ保持シ能ハス之ヲ抵當トシテ他人ニ與ヘタレハ當初ノ基業ヲ復収センコトヲ要求スルハ無益ノ計ニ属セリ之ヲ要スルニ僧侶ハ許多ノ歲月ヲ費シテ莫大ノ富ヲ儲積シ屢々掠奪ノ難ニ罹リテ之ヲ人民ニ還付シ而モ尚ホ

貪得ノ心止マサルモノナリ

第十一回

チヤールス、マルテルノ執柄中歐洲ノ形勢

チヤールス、マルテルハ僧侶ノ財産ヲ剥奪スルニ極メテ適當ナル時ニ遭遇セリ何トナレハ該王ハ恩威ニツナカラ兵士ニ行ハレテ人心歸伏シサラセン人ト開戦スルノ名義ヲ設テ兵士ノ福利ヲ増進シタルヲ以テ僧侶ノ怨怒ヲ受クト雖モ更ニ損益スル所無シ加フルニ羅馬ノ法主ハ該王ノ勢援ニ頼ラサレハ以テ寶位ヲ維持シ能ハサレハ常ニ該王ノ政略ヲ庇護シテ咎メス法主グレゴリー第三世カ曾テ該王ニ使節ヲ送りシコハ世

人ノ皆ナ知ル所ニシテ政權チヤルレス法權グレゴノ  
二柄合縦シ互ニ救護ノ盟約ヲ締成シ法主ハ佛朗克人  
ノ助カヲ得テ能ク倫巴多人希臘人ノ蚕食ヲ防制シ佛  
朗克人ハ亦タ法主ニ頼リテ以テ希臘人ヲ止ムルノ堡  
障ト爲シ且ツ時トシテハ倫巴多人ヲ攻メテ其ノ兵鋒  
ヲ外ニスルノ機ヲ妨ケタリ是レチヤールスマルテル  
ノ政略能ク其圖ニ中リテ萬ニ一失ナキ所以ナリ  
オルリーンノ教正エスユーチエリユス曾テ天神ノ示  
現ヲ説キテ當時ノ君王ヲ恫嚇セシメアリ茲ニレース  
ニ集會セル諸教正ヨリ佛國ヲ征伐スル日月曼王路易  
ニ贈呈シタル書翰ヲ掲テ以テ當時ノ風俗人情ヲ知ラ

シム可シ曰クユーチエリユス卒然神使ノ攝シ去ル所  
ト爲リテ昇天シチヤールスマルテルカ最後ノ審判ニ  
於テ地獄ノ底ニ沈ミ基督ト列席セル諸聖人ノ命ヲ以  
テ百般ノ呵責ヲ受クルヲ見タリチヤールスマルテル  
カ斯ノ冥罰ヲ被ムルハ畢竟生前ニ寺院ノ財産ヲ奪取  
シタルカ故ニ右財産ヲ寄附セシ諸人ノ罪ヲモ併セテ  
一身ニ受クレハナリト於是百賓王ハ會議ヲ開キテ回  
贖シ得ベキ寺院ノ土地ヲ悉ク其旧ニ復セシム可シト  
命令ヲ下シタレモ當時アキユイタイン侯ナルブアイ  
フルトノ爭論未タ局ヲ結ハサレハ僅カニ其ノ一部ヲ  
回贖スルニ過キス故ニ其ノ不足ヲ補フカ爲メニ特ニ

敕書ヲ出シテ民人ノ所有ニ属スル寺領ヨリ十一ノ税  
ヲ納メ更ニ一戸ヨリ十二<sup>デ</sup>ニールス<sup>貨幣</sup>ヲ納ム可キ  
法律ヲ制定シタリ甲列曼帝ハ之ニ及シテ寺領ヲ他人  
ニ譲ル<sup>フ</sup>ヲ許サズ其ノ在位ノ間ハ勿論嗣王ニ至ルマ  
テ之ヲ行<sup>フ</sup>可ラサル旨ノ法例ヲ設ケ之ヲ文書ニ記シ  
而モ二王ノ父ナル路易王第一世カ往々之ヲ諸人ニ演  
述スルヲ見タリ

諸教正カ所謂百賓王ノ規則トハレ<sup>プ</sup>チンスノ會議ニ  
テ制定セシ教會ノ頼リテ以テ其ノ所屬ノ土地ヲ領有  
スルヲ得テ復タ昔日ノ如ク恣ニ與奪サル、ノ虞無ク  
且十一税及ビ毎戸ヨリ十二<sup>デ</sup>ニールス<sup>ヲ</sup>收ムルノ利

益ヲ受用セシ所ノモノナリ然レ<sup>ル</sup>此ノ利益ハ一時僧  
侶ノ心ヲ和解スルニ止マリテ更ニ教會ノ衰頽ヲ挽回  
スル<sup>フ</sup>能ハス

此ノ規則ヲ遵守セス尚ホ旧弊ヲ固執スルモノアリテ  
新法輒スク行ハレサルヲ以テ百賓ハ更ニ他ノ法例ヲ  
設ケテ寺院ノ土地ヲ所有スル者ニ十一税及ビ戸税ヲ  
納ノシムル而已ナラズ寺領ニ属スル家屋ヲ保存セシ  
メテ他人ニ譲與スル<sup>フ</sup>ヲ許サス之ニ背クモノハソノ  
所有<sup>ヲ</sup>没入シ甲列曼帝ニ至テ再ヒ百賓ノ規則ヲ確定  
セリ

前ニ記セル書翰中ニ甲列曼帝ノ在位中ハ勿論相續人

ニ至リテモ決シテ寺領ヲ兵卒ニ割與セスト約定セシ  
ハ該帝カ僧侶ヲ撫慰センカ爲ノニ八百三年ニエイ  
ラシヤツペルニ於テ頒布シタル法例ト全ク事實符合  
セリ且諸教正ガ路易王第一世ハ甲列曼帝ノ遺訓ヲ奉  
シテ寺領ヲ兵卒ニ割與セシト無シト言ヒシモ亦タ不  
當ノ說ニアラス

然レ凡旧染ノ弊風益々増長シテ止マス路易王第一世  
ノ没後ニハ民人ハ寺領アルカ爲ノニ僧侶ヲ撰任シ  
來僧侶ヲ扶持スルカ爲ノニ寺領ヲ寄附シタリシカ  
時ハ寺領アルノ故ヲ以テ僧侶ヲ撰任シテ本末顛倒ス  
云フ或ハ教正ノ承諾ヲ俟ズシテ僧侶ノ住持ヲ禪キ寺  
領ヲ相續人ニテ分配スル等亂妨ヲ極メシヲ以テ教正

ハ終ニ靈物神器ヲ寺院ヨリ他ニ移シ去ルノ己ムヲ得  
サルニ至レリ

コムパクニノ法例ニ國王ノ理事官ハ所有主ノ承諾  
ヲ得テ教正ト俱ニ各寺院ヲ檢視スヘキ權アリト議定  
セルニ據リテ之ヲ觀レハ當時ノ弊風既ニ一國ニ普及  
セシヲ知ルニ足レリ

然リト雖凡寺領回復ノ法律無キニアラス諸教正ハ寺  
院再興ノ事ニ盡カセサルヲ以テ法主ノ譴責ヲ受ケタ  
レハ書ヲ禿王甲列ニ呈シテ自ラ反省スルニ其事タル  
固ト教正ノ過急ニ非サルカ故ニ敢テ此ノ譴責ヲ怖レ  
ズト斷言シ而シテ該王ヲ要シテ曩キニ數回ノ國會ニ



於テ議決約定シ且ツ布告シタル諸法例ヲ舉行セシメタリ  
爾來諸教正ハ我カ權理ヲ固執シテ屈ヒサリシカ那曼  
人ノハ冠ニ遭フテ其習弊止ノリ

第十二回 什一税ノ設立

百賓王ノ治世ニ制定シタル規則ハ唯タ教會ニ救助ヲ  
得ヘキ期望ヲ與フル而已ニテ更ニ救助ノ實効ヲ奏セ  
ス甲列曼カ一切ノ寺領悉ク兵卒ノ占領スルヲタリト  
看取セシハ正ニチヤールヌマルテルカ全國ノ土地皆  
テ僧侶ノ所有ニ屬セリト看取シタルカ如シ而ノ當時  
ノ勢寺院ヲシテ曩ニ贈物サレシ所ノモノヲ收復ヒシ  
ムルヲ能ハサル必ヒリ且事情頗ル爲シ難キ所アリテ

外面ニ現出スル自然ノ状ニ相及シ殊ニ牧師寺院及ヒ  
教導ノ道相立サルガ爲ノニ併セテ基督教ヲ廢止ス可  
ラサルナリ

是レ甲列曼カ新タニ什一税ヲ設立セシ所以ナリ什一  
税ハ特別ノ贈賜トシテ寺院ニ付與ヒシヲ以テ後日ニ  
至リテモ之ヲ強占シタル歲月ヲ知ルニ容易ナレハ僧  
侶ノ爲ノニハ大利アル一種ノ資産ナリ

論者或ハ什一税ノ設立ヲ甲列曼以前ニ在リト爲セ凡  
其ノ引証スル所ヲ觀レハ却テ然ラサルヲ示ス者ノ  
如シシロタリユスノ憲法ニハ唯タ寺領ヨリ什一税ヲ  
徵收ス可ラスト記セルノミ當時教會ノ力更ニ什一税

ヲ聚歛スルヲ能ハサレハ纔カニ之カ免除ヲ請フヲ以テ專一ノ口實ト爲セルナリ

五百八十五年マコンニ第二ノ會議ヲ開キテ什一税ノ上納ヲ命令セル條中ニ該税ハ往古ヨリ納ノ來ルモノニシテ當時ニ至テ廢絶シタル旨ヲ陳述セリ

僧侶ハ甲列曼ニ先チテ既ニ經典ヲ繙キテ利未記ノ贈賜ノ事ヲ宣講セシトハ衆ノ能ク知ル所ナリト雖氏此時マテ唯タロニ什一税ノトヲ唱フノミニテ未タ之ヲ實行スルニ至ラザリキ

既ニ論ゼシタ如ク百賓王ノ時ニ制定シタル規則ハ封田ノ法度ニ從テ寺領ヲ受領スル者ニ什一税ヲ納メシ

ノ以テ寺院ノ修繕ニ充ツ而モ國中ニラ名望アル士人率先シテ其ノ義務ヲ竭シ人民ヲシテ其ノ典型ニ則トラシムルカ故ニ執法平允ノ要領ヲ得タリ

甲列曼ハ更ニ一步ヲ進メド、バイルリスノ法例ヲ以テ帝室ノ采地ヨリモ什一税ヲ納メテ人民ニ著明ナル模範ヲ垂示セリ

然レモ平民ハ輒スク上流ノ舉動ニ風靡シテ已カ利益ヲ損スルモノ鮮ナク甲列曼ノ模範殆ト徒爲ニ屬マルヲ以テフフンクフオールドノ宗教會議ニ於テハ特ニ人民ヲシテ什一税ヲ納メシムルカ爲メニ一種有力ノ感念ヲ喚起セリ右會議ニテ制定セル法例ニ曰ク客歲ノ

凶歉ニ諸穀ノ穂悉ク鬼神ノ呑ム所ト爲ルヲ以テ一粒ノ収獲ヲモ見ル可ラサル而已ナラス右鬼神ハ平民カ付一稅ヲ納メザルニ就テ憤怒ノ言ヲ發セリト斯ク附會ノ說ヲ作シテ寺領ヲ所有スル者ニ悉皆付一稅ヲ納メシメ終ニ之ヲ擴張シテ人民一般ノ義務ト爲セリ

甲列曼ノ政略ハ頗ル人民ノ負擔ヲ増スニ庶幾スルガ故ニ容易ニ期圖スル所ノ目的ヲ達シ能ハス蓋シ猶太人カ付一稅ヲ納メタルハ全ク共和政創立ノ舉ニ關係シタレ氏佛國ニテ該稅ヲ徵征シタルハ絶テ立君政ヲ創立スルガ爲メニ需要スル諸稅歛ニ關係セサレハナリ且倫巴多ノ追加法律ニ據リテ以テ該稅ヲ民法上ニ

於テ認可スルノ甚ク困難ナルヲ見ル可ク又宗教會議ノ諸布達ニ據リテ以テ其ノ未タ教會律ニ於テ該稅ヲ許容セザル前ニハ之カ貢納ヲ抵抗スルモノ實ニ多キヲ知ルハシ

後日ニ回復ノ權ヲ持有ス可キ約束ヲ以テ人民ハ終ニ付一稅ヲ納ムル旨ヲ認可シタリ若シ路易王第一世及ビ嗣君ロタリユス帝ノ憲法ニ依ラス決シテ許サマル所ナル可シ

甲列曼カ制定セル付一稅設立ノ法制ハ固ト情勢已ム可ラザル措置ニ出ルモノニテ決シテ鬼神ニ惑溺シテ然ルニ非ズ之ヲ約言スレバ唯タ教門ノ治法ニ關係シ

テ然ルノミ

甲列曼ガ什一税ヲ寺院ノ修繕、救恤、教正及ヒ僧侶ノ四  
大部ニ分テ支消セシメタル措置ヲ觀レバ則チ其ノ趣  
意ハ寺院ヲ維持シテ永久鞏固ナラシメテ掠奪前ノ  
舊觀ニ復セシメント欲セシヤ甚タ明カナリ

該帝ノ遺訓ヲ省レハ其ノ祖父チャールス、マルテルカ  
行ヘル強暴ノ跡ヲ繙縫セント欲スルモノ、如シ即チ  
其ノ移動財産ヲ三大股ニ均分シテ其ノ二大股ヲ廿一  
小股ニ分テ帝國中二十一府ノ寺院ニ贈賜シ再ヒ其ノ  
一小股ヲ分テ各教正ノ受用ニ供シ自餘ノ一大股ヲ四  
部ニ分チ其ノ一部ヲ留メテ子孫ニ讓授シ一部ヲ其ノ

既ニ寺院ニ贈與シタル二大股ニ加ヘ他ノ二部ヲ施濟  
救恤ノ用ニ供シタリ是ニ依テ之ヲ觀レハ該帝カ巨億  
ノ財産ヲ寺院ニ抛チタルハ政略上ノ措置多キニ居テ  
宗教上ニ係ルモノ却テ少ナキニ似タリ

第十三回 教正長老ノ選法ヲ論ス

寺院ノ富饒漸ク窮乏ヲ告ケテヨリ諸王ハ自ラ住持撰  
任ノ權ヲ放擲シテ惜マス僧侶ノ事ニ干涉スルノ政圖  
漸ク衰ヘ候補ノ人モ亦タ有司王室ニ鑽刺スルノ熱心  
熄ムニ至ル於是寺院ハ局外ニ安堵シテ曩キニ受得タ  
ル損失ヲ償フタリ

是故ニ路易第一世カ法主選舉ノ權ヲ羅馬ノ人民ニ放

任シテ顧ミサルモ全ク當時ノ人情ニ因循スルモ  
ノニシテ該王ノ羅馬法主ヲ視ルハ猶ホ自餘ノ諸教正  
ニ於ルニ異ナラス更ニ寺院ノ所領ニ垂涎ノ心アラサ  
レハナリ

第十四回

チャールス、マルテルノ封建制ヲ論  
ズ

チャールス、マルテルガ寺院ノ土地ヲ奪フテ封田ト爲  
シ之ヲ臣下ニ受領セシムルニ方リテ終身ノ賜ト定メ  
シ乎若クハ子孫ニ世襲セシメシ乎必スシモ茲ニ之ヲ  
斷定スヘキニ非スト雖厓魯達利第一世ノ時ニ於テ既  
ニ嗣子ノ承襲スヘキ一種ノ基業アリテ分配シタルヲ

アルヲ見タリ

且又右基業ノ一部ヲ私有地ト爲シ一部ヲ封田ト爲シ  
テ賜與シタルヲ見タリ

私有地ノ持主カ諸公役ノ義務ヲ竭サ、ルヲ得ザルヲ  
恰モ猶ホ封田ノ受領者ニ異ナラサルハ前ニ論スル所  
ノ如シ是レチャールス、マルテルガ私有地ヲ封田ト一  
様ノ方法ニ依リテ臣下ニ賜與シタル所以ノ一ナルヘ  
シ

第十五回 同上

讀者ハ須ラク封田改易シテ首領ト爲リ寺領一變シテ  
再ヒ封田ト爲リ彼此ノ体用互交シテ寺領ニ封田ノ特

權ヲ借り封田復タ寺領ノ殊典ヲ占領セルニ着眼セサル可ラス是レ當時寺院ノ特准ノ起ル淵源ニシテ而モ之ヲシテ封田ノ名ヲ冒稱セシムルヨリモ永ク裁判權ヲ兼併スルニ若カサルヲ以テ遂ニ同時ニ寺領ノ裁判權ヲ創立スルニ至レリ

第十六回 王權ト廷宰職ト混一セシメ第二

朝ノ王室

未タ王位ノカロブインジヤン家ニ禪讓セシメテ説カサル前ニ甲列曼ノ時事ヲ論セル所以ハ論脉相連リテ斷エサルニ依リ時代ノ順序ニ循フ能ハサレハナリ此ノ革命ハ非常ノ變動ニシテ尋常ノ觀ヲ作ス可テサ

レハ今日吾人ノ心思ニ感觸スルハ之ヲ目撃シタルノ當時ヨリモ更ニ著明ナル可シ

當時王室ハ唯タ國王ノ虚名ヲ擁スル而已ニテ更ニ實權無ク而ノ朝廷ニハ世襲ノ國王アリ公選ノ廷宰職アリテ宛モ二主並立ノ状ヲ爲シ若シ王位ニ缺ラ生スルヲアレハ廷宰職ノ權ヲ以テメロブインジヤン家ヨリ一人ヲ撰テ嗣王ト定ノタリ然レモ未タ他姓ノ人ヲ選立セシメ絶テ無シ是レ王位ヲ一姓ニ定ムル古法旧例ノ未タ佛朗克人ノ心腔ヲ脱シ去ラサルナリ國王ハ九重ノ中ニ拱默シテ政務ニ干預セサレハ國民ハ殆ト王躬ヲ識ラス其ノ安否ヲ窺フニ由ナケレモ王權ハ依然

ト確立シテ覬覦ノ心ヲ生スルモノ無キナリ然ルニチ  
ヤールス、マルテル死シ其子百賓ニ至テ累代廷宰職タ  
ルノ積威ニ依リテ名實ノ二器ヲ混淆シテ以テ王權ハ  
果シテ世襲ノ者ニ係ルカ抑モ又否ラドルカノ論端ヲ  
開キ茲ニ國王ノ虚器ヲ廷宰職ノ實權ニ併セシメニ  
ヲ謀リシカハ國王ト廷宰職トノ威權混一シテ其區域  
判然タラス却テ名實和合ノ色ヲ現シテ廷宰職ハ人民  
ノ公選ニ出テ國王ハ世襲ノ旧ニ仍リテ各其ノ所ヲ得  
タリ第ニ朝ノ初メニ方リテハ人民ヨリ國王ヲ選定ス  
ルガ故ニ公選ノ名ヲ下シ而モ常ニ一姓ニ限リテ決シ  
テ他家ヨリ撰立セラルガ故ニ復タ世襲ノ稱ヲ付ヤシ

ナリ

コイントハ一概ニ旧記古書ノ証據ノ抹殺シテ羅馬法  
主カ禪讓ノ事ヲ認可セシトノ説ヲ辯駁シタリ之ヲ辯  
駁シタル理由ノ一ハ果シテ斯ノ如キハ法主不義ノ舉  
ニ與セサルヲ得スト謂フニ在リ見ル可シ史家カ自己  
ノ地位ニ拘泥シテ事實ヲ憶断スルヲ若シ之ヲ然リ  
トセハ今日更ニ歴史ナキノ却テ優ルニ如カス  
何等ノ異説アルニ拘ラス百賓一タヒ戎衣シテ大業ノ  
基ヲ開キテ後ハメロブインジャン家ノ政權忽チ地ニ  
墜テ再興フ望ム可ラサルハ極メテ明カナリ其孫百賓  
王ノ即位ニ至テハ唯タ大禮ヲ執行シテ威儀ヲ人民ニ

誇示スルニ過キス其ノ所獲ハ國王ノ軒冕ニシテ固ヨ  
リ一點ノ實益アルニアラス亦タ全國ノ政務ニ於テモ  
更ニ變更スル所ナシ

茲ニ之ヲ掲クル所以ハ革命ノ時ヲ知ラシメンガ爲ノ  
ナリ讀者必ス革命ノ效果ヲ認メテ真ノ革命ナリト誤  
解ス可ラス

第三朝ノ初ニヒユー、カベットカ王冕ヲ着セシ時ハ殆  
ト無政ノ狀ニ陥リタル國亂ヲ平ケテ維新ノ政府ヲ設  
立セルヲ以テ之ヲ國家ノ鼎革ト稱ス可シト雖凡百賓  
王ノ即位ノ時ハ唯タ王位ヲ禪讓スルノミニテ更ニ政  
体ヲ變換セシナシ

再ヒ之ヲ言ヘハ百賓王ノ即位ハ王家ノ姓ヲ改ムルニ  
過キザレヒヒユー、カベットノ踐祚ニ方リテハ強藩ノ  
積威一王位ヲ加ヘテ亂ヲ撥キ正ニ及ルノ實功アルヲ  
以テ之ヲ國家ノ鼎革ト稱セリ

又百賓王ノ即位ハ尊号ヲ朝廷ノ權官ニ合併シヒユ、  
カベットノ時ニハ之ヲ強藩ノ封土ニ加ヘタルナリ

第十七回 第二朝ノ諸王ヲ選舉セル細目

百賓ノ冠禮記ニチヤールス、カルロマンノ二王モ亦タ  
灌油ノ禮ヲ行ヒ且佛國ノ貴族ニ決シテ他姓ノ人ヲ選  
舉セザル旨ヲ誓約セシノ之ニ違フモノハ宗教禁絶ノ  
罰ニ處スヘキ旨ヲ記スヲ看タリ



甲列曼及ヒ路易第一世ノ遺訓ニ佛朗克人カ諸王ノ子弟中ヨリ一人ヲ撰テ王位ニ即カシムルヲ觀ル可ク全ク冠禮記ニ所載ト符合セリ而シテ甲列曼家ヨリ帝國ヲ他姓ニ讓ル以前ハ官民ノ契約ニ基テ國王ヲ選舉シタレバ爾來更ニ一定ノ制限ヲ設ケス古法旧憲自ラ變革セリ

百賓ハ親ラ死期ノ將ニ近キニ在ルヲ知リテ七百六十八年ニ僧俗ノ貴族ヲ聖デニスニ集會シテチャールス、カルロマンノ二子ニ王國ヲ分領セシメタリ右集會ノ議定書ハ今日ニ觀ルヲ得ザレバカニシユスノ刊行ニ係ル古史集錄及ビノンツノ編年記ニ據リテ當時ノ事

情ヲ知ルニ足ルヘク且亦互ニ矛盾セル二件ヲ看出ス可シ即チ百賓カ最初ニハ貴族ノ兼諾ヲ經テ國王ヲ二子ニ分割シ然後復タ父權ヲ以テ之ヲ讓與シタルナリ是レ既ニ論セシカ如ク第二朝ニ於テハ人民カ一姓中ヨリ國王ヲ選立スルノ權ヲ所有スルヲ証明スル所ニシテ之ヲ選舉ト謂フヨリモ寧ロ異姓ヲ排斥スルノ權ト謂フニ若カス

如是選舉權ハ第二朝ノ記錄ニ明文アリ即チ甲列曼ガ其ノ帝國ヲ三子ニ分領セシメタル法例ノ如キ是レナリ右法例ニ甲列曼ハ三子ニ分領セシムヘキ封域ヲ定メ訖リテ更ニ遺令シテ曰「若シ三人ノ兄弟中ニ子ヲ舉

テ而モ衆望之ニ歸シテ父ノ王國ヲ兼襲セシムベキ人物ナリト推戴スルカハ伯叔父ハ之ヲ認可セサル可ラス

路易第一世カ紀元八百三十七年アイラチヤベルノ集會ニ百賓路易甲列ノ三子ニ遺領ヲ分與セシ時ト及ヒ之ヨリ二十年前ニ該帝カ魯達利百賓路易ノ三子ニ版圖ヲ分割セシ時ニ於テモ前記全様ノ規則ニ遵依セシヲ着出スベシ又ルーイデ、スタムノルカ即位ノ誓ニ曰ク「小子路易幸ニ神慮民望ニ依リテ王位ニ登リ得ルヲ以テ左件ヲ約定ス云々茲ニ記ス所ハボーノンノ子路易ヲアルレノ國王ニ選立セシカ爲メニ八百九十年

ニブアレンスニ開キタル會議ノ議定書ニ據リテ証明スベシ而メ人民カ路易ヲアルレノ國王ニ選立シタル要領ハ蓋シ皇族ニシテ而モ現ニチヤールス、デ、ブアツトヨリハ王号ヲ受得シアルノルド帝ヨリハ執主ノ禮ト大臣ノ議トニ依リテ封土ヲ授與セラレタレハナリ而メアルレノ王國ハ甲列曼カ分割セル自餘ノ國土ニ齊シク王位ハ公選ニシテ世襲ヲ兼ルモノナリ

第十八回 甲列曼帝

甲列曼ノ治術ハ貴族ノ權カヲ一定ノ範圍内ニ約束シテ自主民及ヒ僧侶ヲ凌轢スルヲ能ハガラシメ、全國ノ諸民族ヲ調停シテ能ク互ニ相抗シ相制セシムテ輕重

ノ勢ヲ平均シ而モ一身ノ智力以テ天下億兆ノ望ヲ繫  
 キテ乖離ノ患ナカラシメ、斷エス貴族ヲ率井テ遠略外  
 征ニ從事セシメ、黨與ヲ結ヒ反亂ヲ謀ルニ暇ナカラシ  
 ムル而已ナラス之ヲ驅使シテ以テ羣雄ヲ掃攘シ帝業  
 ヲ經營スルノ用ニ供セリ蓋シ甲列曼ノ帝國ハ全ク該  
 帝ノ英明寛大ヲ以テ維持スル所ニシテ其ノ國君タル  
 ノ人爵モ亦タ貴カラサルニ非サレモ必竟ハ君位ニ在  
 ルハノ天爵一層貴重ナルヲ覺エタリ諸國ノ王位ヲ踐  
 ム所ノ諸皇子ハ人臣ノ極位ヲ占メテ帝室ノ權威ヲ皇  
 張スル器械ト爲リ兼テ又之ヲ遵守スルノ模範ト爲レ  
 リ帝ノ制定セル法律ハ固ヨリ明良ニシテ讚美スヘシ

ト雖モ其ノ一層ノ讚美ヲ加フベキハ之ヲ施行シテ怠  
 ラサルニ在リ帝ノ聰明ハ版圖ノ四表ニ光被シテ一モ  
 之ヲ壅蔽スルモノ無シ帝ノ制定セル法律ハ遠慮慎密  
 ニシテ百事ヲ包括シテ洩サス而モ其中ニ抗抵ス可ラ  
 サル作用ヲ有セリ譬ヘハ職務ノ勤勞ヲ遁ル可キ口實  
 ヲ排斥シテ怠慢ヲ匡正シ弊害ヲ改革シ或ハ之ヲ遏止  
 スルガ如キ是レナリ帝固ヨリ用刑ノ寛嚴ヲ知レリト  
 雖モ更ニ能ク赦罪ノ道ニ通セリ帝ノ謨猷ハ甚タ遠大  
 ニシテ之ヲ施設スル方略ハ甚タ簡易ナリ帝ノ如ク聲  
 色ヲ動かサス從容トシテ大業ヲ成シ咄嗟ノ間ニ至難  
 ノ事ヲ理ムヘキ經綸ノ大才ヲ具フモノハ古來未タ曾

テ見サル所ナリ帝ハ常ニ四方ニ巡狩シテ僻壤邊土ヲ  
モ遺サス到ル所ノ人民ニ恩威並ヒ行ル、一ヲ感知セ  
シノタリ又四方ニ難事ノ起ル一アレハ輒チ躬親ラ之  
ヲ滅絶シテ更ニ退屈ノ色ナシ從來君主ニシテ勇進敢  
爲危険ヲ冒シテ恐レサルモノ未タ曾テ帝ノ如キヲ視  
ス巧ニ之ヲ迴避スルノ術ヲ知ルモノ未タ曾テ帝ノ如  
キヲ視ス帝ハ危懼ノ状態ヲ作ス一ヲ耻チタリ殊ニ古  
ヨリ大業ヲ成セル英雄ノ免レサル卑怯心即チ人民ノ  
謀反ヲ恐ル、一無シ此ノ如ク天下ヲ聳動スルニ足ル  
ヘキ大功業アレモ居常極メテ節ヲ制シ度ヲ謹ミテ放  
縱ニ流レス性情甚タ温厚躬行甚タ純樸ニシテ常ニ朝

紳貴族ト說話スルニ好テ赤心ヲ吐露セリ唯ダ好色多  
情ノ一事ノミ以テ帝ノ瑕瑾トス可シ然レモ輔弼ノ力  
ヲ藉ラス大業ヲ草創シ親ラ萬機ヲ統ヘ且掛風浴雨ノ  
勞ヲ厭ハス一生ヲ艱難ノ中ニ費ス英雄ニ在リテハ未  
タ以テ失徳トスルニ足ラス帝ハ深ク心ヲ節儉ニ留メ  
テ直隸地ヲ治メ度支ノ精密ナル驚クニ堪ヘタリ其ノ  
一家ヲ治ムル規則ハ凡ソ天下ノ父タル者ノ典型ト爲  
スニ足り其ノ制定セル法例ニ據リテ以テ帝ガ大富ヲ  
積ミクル泉源ヲ看出ス可シ爰ニ一言シテ其ノ經濟ノ  
一斑ヲ示サン帝曾テ命ヲ下シテ帝莊ノ農舍ニ在ル鶏  
卵及ヒ剩餘ノ菜蔬ヲ賣却セシノタル一アリ之ヲ倫巴

多ノ富財ト全世界ノ強盜タル匈奴ノ物貨ヲ舉テ全國ノ人民ニ頒賞シタルノ大君ト全一ノ人ト認ム可キヤ其ノ公賞ニ豊ニシテ私費ニ吝ナル嘆稱スヘキナリ

第十九回 同上

甲列曼ハ遠隔ノ地方ヲ鎮撫スル將帥中或ハ不軌ハ心ヲ生スル者アラシムヲ憂慮スルヨリ遂ニ之ヲ順良ナル僧侶ニ依頼スルニ若カスト爲シ日耳曼ノ地方ニ數多ノ教正領ヲ設ケ之ニ廣大ナル封田ヲ寄贈シタリ二三ノ准許狀ニ據レバ該封田ノ特權ヲ記セル文言ハ今日日耳曼ニ於テ重要ナル寺院ニ主權ヲ授與スル時ノ給與狀ニ記ス所ト毫モ異ナルヲナシ然リト雖是レ

或ハ薩遜人ヲ防禦スル一策ニ過キサル可シ何トナレハソノ封臣ノ怠慢或ハ二心ヲ懷クモノニ期シ難キ所ノモノヲ將テ之ヲ諸教正ノ勤慎公事ヲ奉スルモノニ期シテ安心ス可シト思惟シタレハナリ加之僧侶ノ如キハ決シテ亡國ノ人民ヲ用井テ以テ主公ニ抗敵スルノ患ナキ而已ナラス人民ニ對シテ一身ノ位地ヲ保護スルカ爲ノニハ必ス主公ノ扶助ヲ要セサルヲ得サレハナリ

第二十回 路易王第一世

該撒曾テ埃及ニ在リテ命シテ歷山大帝ノ墳墓ヲ發カシメタリ時ニ人アリフトレミーノ墳墓ヲモ見ルヲ

好ムヤト問ケレハ該撒答テ否ナ予ハ古ノ英雄ヲ見ン  
ト欲ス更ニ塚中ノ枯骨ニ用ナシト謂ヘリ然レハ佛國  
第二朝ノ史傳中ニ於テモ常ニ百賓甲列曼ノ如キ真主  
ノ事蹟ヲ探求シ更ニ身没シテ名モ亦從テ滅スルモノ  
ヲ問ハサルナリ

一身ノ情欲ニ昏迷シテ之ニ克テ能ハサル而已ナラス  
其躬ニ具フ所ノ美德ニマテ束縛セラレテ之ヲ活用シ  
能ハス自ラ我カ智愚強弱ヲ測リ能ハス恩威並ニ施シ  
テ以テ人民ノ愛敬ヲ博取シ能ハサル人君往々之レア  
リ約言スレハ身ニ失德少ナケレバ善柔暗弱ニシテ英  
明果斷ノ氣象ニ乏シ此ノ如キ君主ヲシテ不世出ノ英

雄タル甲列曼カ經營セル天下ヲ制馭セシムルハ不倫  
ノ甚シキモノト謂サル可ラス

普天ノ下皆ナ先帝ノ崩殂ヲ号泣シ億兆ノ臣民舉テ其  
ノ威德ヲ哀慕シ嗣君タルモノハ先帝ノ社稷ヲ繼續セ  
ンガ爲メ晝夜兼行シテ京師ニ赴クヘキ緊急ノ時ニ際  
シ路易ハ先ツ心腹ノ人ヲ遣ハシ以テ其ノ姉妹ノ失政  
ヲ助ケタル奸吏ヲ捕縛セシメタリ其ノ繼續ノ初メニ  
施行セル計略斯ノ如ク甚タ輕躁急劇ニシテ躬未タ禁  
闥ニ入ラスシテ先ツ宮中ノ私罪ヲ罰シ未タ寶祚ニ登  
ラスシテ既ニ民心ノ乖離ヲ致セリ他日慘烈ナル禍害  
ヲ生スルモ良ニ以アルナリ

伊太利王ベルナルドハ叔父路易ニ寛典ノ處分ヲ願フ  
カ爲メニ入覲シケレハ直ニ兩眼ヲ抉出サレ數日ヲ經  
テ終ニ死去セリ於是路易ヲ惡ムモノ漸ク多ク而メ其  
ノ後患ヲ懼ル、ノ卑怯心ヨリ遂ニ兄弟ヲ捕ヘテ寺院  
ニ幽閉シケレハ冤家ノ數益々多數ヲ加ヘタリ此ノ二  
事乃チ他日路易ノ罪ヲ鳴ラス所ノ口實ト爲リ之ニ加  
フルニ路易カ誓詞ニ背キ且ツ冠禮ヲ行フ日ニ先帝ニ  
誓ヒタル契約ヲ破リシ一ヲ以テセリ

皇后ヘルメンガルダスニ三子アリ其ノ死後更ニジユ  
ヂヲ娶リテ一子ヲ生シ晩年ニ至リテ漸ク滯逸ニ耽リ  
テ政事ニ倦怠シ是ヨリ乾綱解弛シ國事日ニ陵夷シテ

王室ノ亂ト爲リ遂ニ社稷顛覆スルニ至レリ  
諸子ニ分領セシムル土地ハ原ト帝カ親ラ誓詞ヲ爲シ  
而メ復タ諸子貴族ノ誓言ヲ徵取セシ上ニテ封建セシ  
所タルヲモ顧ミルナク爾後屢々其ノ方域ヲ更改シ  
テ廣狹定マラス帝ノ行爲ハ宛モ臣民ノ信否ヲ試ムル  
者ノ如ク又ハ故ラニ順序ヲ錯亂シ若クハ兩端ニ依違  
シテ決行ヤス以テ臣民ヲシテ適從ノ方向ニ迷惑セシ  
ムル者ノ如シ就中朝廷ノ武備未タ全カラス恃テ以テ  
金城湯池トスルハ臣民ノ忠勤無ニ誓詞ニ在ルノ時  
ニ方リテ諸子ノ權理ヲ紊亂シテ自ラ其ノ位地ヲ動搖  
セシメ遂ニ臣民推戴ノ心ヲ削弱セリ

故ニ諸子ハ各自ニ分領ノ封土ヲ保存セント欲スル熱心ヨリ競フテ僧侶ノ哀憐ヲ乞ヒ唯タ其ノ肯セサルヲ恐レテ從來未タ曾テ許サルノ特准ヲモ受用セシノタリ右特准ハ原ト一時ノ作言ニ過キサレ氏僧侶ハ之ヲ受用スル報酬トシテ諸子ノ願望ヲ成就セシムルニ盡カスヘキ旨ヲ保証シタリ僧正アゴバルドヨリ路易王第一世ニ捧タル書簡ニロタリユスノ帝號ヲ天下ニ布告セシカ爲メニ該皇子ヲ羅馬ニ赴カシノ又三日ノ間齋戒斷食ノ苦行ヲ修ノテ天帝ニ祈願シテ後ニ諸子ニ領地ヲ分配シタルヲ記ヒリ昏愚斯ノ如キ君主ナレハ宗教ニ惑溺シテ政權ノ衰替ヲ致スハ當然ノ事ニ

シテ深ク咎ムルニ足ラス其ノ教會ノ爲ノニ禁錮ノ罰ヲ受ケ且公然ト我カ罪ヲ懺悔シタルニ事ニ擬リテ以テソノ狼狽セル状態ヲ視ル可シ諸子ハ帝ノ一身ヲ凌辱スル而已ナラス併セテ帝室君位ヲ凌辱スルモノナリ路易第一世ハ君德頗ル備ハリ固ヨリ昏愚ノ資ニアラス加フルニ甲列曼大帝ノ嗣君ニシテ何故ニ人民ノ怨府ト爲リテ寶祚ヲ保存スルヲ能ハス終ニ身辱カシメラレ國ヲ喪フニ至ルカ然ル所以ノ理甚タ解シ易カラス若シ諸子ヲシテ苟クモ信義ヲ守リテ欺カス兄弟相和睦シテ大事ヲ謀ラシノハ其ノ目的ヲ達マルヤ必然ナリ



## 第二十一回 同上

甲列曼ノ遺業タル帝國ノ富強ハ路易第一世ニ至テモ依然其ノ面目ヲ改メス以テ内ハ大國ノ勢威ヲ維持シテ墜サス外ハ他國ノ侮辱ヲ来サス而ノ國君ハ柔弱ナレ人民未タ尚武ノ氣象ヲ失セス故ニ外面ヨリ觀察スレハ更ニ君權衰微ノ兆ヲ現セスト雖内ハ漸ク政綱陵夷ノ弊アルヲ免レス

チャールス、マルテル、百賓、甲列曼ノ英傑續テ國王ノ位ヲ踐ミチャールスハ兵士ニ媚テ其ノ擄掠ヲ肆マニセシノ他ノ二君ハ僧侶ニ諂フテ專ラ聚斂ヲ爲サシノタリ

國憲ニ據レハ國家ノ全權ヲ舉テ國王貴族僧侶ノ三局ニ分属セシメテ常ニ鼎峙ノ勢ヲ持スルカ故ニチャールス、マルテル、百賓、甲列曼ノ三君ハ機變ニ應シテ之ヲ用捨シ時トシテハ此ニ合從シテ彼ヲ壓制スルヲナキニ非サレモ平日ハ兩黨ト協和シテ利害ヲ共受セリ路易第一世ハ之ニ及シテ兩黨ノ心ヲ籠絡スルヲ能ハスシテ其ノ公敵ト爲レリ何トナレハ寺院ニ關涉スル政令偏固ニシテ之カ節制ノ道ヲ知ラス頒布ノ法規嚴酷ニシテ諸教正ノ意ヲ傷ヘリ夫レ法律ノ精神良美ナリト雖モ之ヲ執行シテ肯綮ニ中ラサルヲ無キニアラズ當時教正ハ撒拉人、薩遜人ノ防戦ニ盡カスルニ甚タ

熱心ニシテ教法ノ一途ニノミ從事セサレハナリ又一  
方ニ於テハ路易ハ貴族ノ信憑ヲ得ル能ハザルカ故ニ  
外國ノ人若シクハ卑賤ノ民ヲ拔擢シテ要路顯職ニ置  
キ以テ貴族ヲ擯斥スル等其ノ政略ハ斯ノ如ク貴族僧  
侶ノ不平ヲ醸スニ外ナラサルカ故終ニ一朝滅亡ノ禍  
ニ及ヘリ

第二十二回 同上

然レモ王綱衰替セル實因尚ホ一アリ賞賜度ナク濫リ  
ニ王室ノ采地ヲ寵臣ニ授與シタル是レナリ讀者宜シ  
ク我國ニテ最モ明斷ナル史家ノ一人クルニタルドノ  
説ヲ聽ク可シ氏ハ甲列曼ノ孫ニシテ深ク路易第一世

ニ心服シ禿王甲列ノ命ニ依リテ該帝ノ本紀ヲ撰ミシ  
人ナリ

曰クアデルハルド 者アリ一時非常ノ寵ヲ得テ萬機  
其言ヲ聽テ次行シ更ニ是非ヲ問ハス右嬖臣ノ推薦ニ  
係ルモノニハ誰何ヲ論セス所望ノ官地ヲ授與シテ拒  
マズ終ニ國家ノ元氣ヲ損傷セリト據此觀之帝カ到ル  
所ニ朝廷ノ采地ヲ削リテ社稷ノ不利ヲ招キシトハ既  
ニアクイタインヲ割與セル失策ニ就テ論スルカ如シ  
該州ノ割與ハ幸ニ甲列曼ノ生前ニ係ルヲ以テ之ヲ収  
回スルヲ得タレモ其後ノ土地ニ至テハ一タヒ去リテ  
更ニ挽回ノ術ヲ得ス

國勢危急ノ状ハ宛モチヤールス、マルテルガ始ノ廷  
宰ノ職ヲ嗣キタル時ノ如ク百事瓦解シテ亦タ爲ス可  
ラス自ラ狂瀾挽回ノ念ヲ絶スルノ外他策ナシ  
國帑匱乏ヲ告テ朝廷ノ疲弊ハ名状ス可ラス禿王甲列  
ノ時ニ至テハ公然賂金ヲ收メテ官職ヲ鬻ク而已ナラ  
ス之ヲ納レサレハ一身ノ安全ヲモ保ツ可ラス而モ人  
民ノ力能ク那曼人ヲ討テ必勝ヲ得ル間ハ賄賂ヲ収メ  
テ之ヲ窮追セスシテ後日ノ大患ヲ貽シ且ヒンクマル  
ガルーイーゼ、フタムメルニ建言セル第一策ハ王府ノ經  
費ヲ償フニ足ルベキ金額ヲ國會ニ請求スルナリ

第二十三回 同上

僧侶カ路易第一世ノ諸子ヲ翼戴セシメテ後悔セルモ  
敢テ其理ナキニアラス帝<sup>路易第一世</sup>ハ曾テ敕狀ヲ以テ一  
個ノ寺領ヲモ俗人ニ賜與セシメ無シト雖氏諸子ノ中  
ニテ伊太利ヲ領セルロタリユース、アク井<sup>イニ</sup>ヲ領  
セル百寶ハ未タ幾クナラスシテ甲列曼ノ遺訓ヲ棄テ  
チヤールス、マルテルノ政略ヲ復用シケレハ僧侶ハ忿  
懣ノ餘諸子ノ無狀ヲ愁訴シタル氏既ニ自ラ幾分ノ權  
理ヲ削弱シタルヲ以テ満足スヘキ結果ニ到ラスアク  
イタインニ於テハ稍々俯就ノ状アリタレ氏伊太利ニ  
於テハ絶エテ一ノ應效ヲ生セサリキ  
路易第一世ノ身ヲ終ルマテ寧所ニ違ナキ内亂ハ即チ

其ノ没後ニ破裂スルモノ、種子ナリロタリユス及ヒ  
路易甲列ノ兄弟ハ各貴族ノ歡心ヲ買フテ我カ黨與ニ  
収メント欲スルガ故ニ苟クモ歸順ノ志アルモノニハ  
忽チ救状ヲ以テ寺領ヲ授與セリ是レ僧侶ノ資産ヲ取  
テ以テ貴族ノ犠牲ニ供セシナリ  
集會法例ノ中ニ諸王カ情勢已ム可ラサルノ要求ニ應  
シ且ツ擅ニ與奪ス可ラサル資産ヲ僧侶ヨリ強取セシ  
一ヲ記シ又僧侶カ貴族ノ暴虐ヲ怨ムハ國王ヨリモ甚  
シキヲ記スヲ看タリ禿王甲列ハ寺領ヲ視ル一讎敵ノ  
如ク奪ハガレハ止マス是レ其父曾テ僧侶ニ侮辱サレタ  
ル宿憤ヲ報スル爲ノカ或ハ平生ノ卑劣心ニ依リテカ

姑ク置テ論セサルモ集會法例中ニ僧侶ハ我カ土地ヲ  
要求シ貴族ハ之ヲ返付スル一ヲ拒ラ爭論絶エス國王  
ハ兩黨ノ間ニ依違シテ勸解ニ拮据スルヲ看タリ  
局外ニ居テ當時ノ事情ヲ觀レハ實ニ浩嘆ニ堪ハサル  
モノアリ路易第一世ソノ直隸地ヲ割テ僧侶ニ賜ヒ之  
ヲ寺領ト爲セハ諸子却テ之ヲ僧侶ヨリ奪テ俗人ニ分  
領セシノ甚タシキハ一君ノ措置前後齟齬シテ定マラス  
一方ニ於テハ僧侶ノ富財ヲ増シ一方ニ於テハ之ヲ剥  
奪スルヲリ僧侶ノ資財安固ナラス或ハ掠奪ノ禍ヲ受  
ケ或ハ満足スベキ報償ヲ得ル時アリ然レモ概ノ之ヲ  
言ヘハ常ニ王室ノ損失タルヲ免カレス

禿王甲列在位ノ末年ヨリ以降僧侶ノ間ニ横ハル寺領  
回復ノ爭論相止ミタリ但シ諸教正ヨリ甲列ニ上書シ  
テ不平ヲ愁訴セシハ八百五十六年ノ集會法例及ビ  
八百五十八年ニ諸教王ヨリ日耳曼王路易ニ贈リタル  
書簡中ニ記ス 看ルト雖氏徒ニ契約ノ履行ヲ催促ス  
ルノ建白タルノミニテ王室貴族屢々其言ヲ食ムヨリ  
僧侶ハ自ラ情願ヲ達スルノ念頭ヲ放下セリ  
當時一般ニ期望セシ處ノ措置ハ寺院及ビ國家ノ受ケ  
得タル損害ヲ脩補スル一事ニ在リテ國王ハ貴族ニ向  
テ所屬ノ自主民ヲ奪取セサル可シト約定シ僧侶ニ向  
テハ敕狀ヲ以テ更ニ寺領ヲ他人ニ授與セザルヘシト

約定シ於是僧侶貴族ノ利益一時和合ノ狀ヲ成セシカ  
如シ

那曼人ノ入寇ハ大ニ僧俗ノ間ニ起レル爭論ヲ結收ス  
ルニ預リテカアリトス

前後ニ論述スルカ如ク諸王ノ權威日ニ月ニ減縮シケ  
レハ遂ニ手ヲ束子テ其躬ノ僧侶ノ庇蔭ニ托スルノ外  
ナキニ至レリ是ニ於テ僧侶ハ一時能ク王權ヲ壓倒シ  
タレ氏終ニハ之カ爲ノニ亦タ教門ノ衰替ヲ致セリ  
禿王甲列及ヒ其ノ嗣君カ應援ヲ寺院ニ求メテ國家  
滅亡ヲ防カント謀リ庶民ノ僧侶ニ歸依スル所ノ信心  
ヲ君主ニ移サシメテ以テ王室ヲ維持セント謀リ又朝

廷制定ノ法律ヲシテ教會律ノ作用ヲ有セシメシムルヲ  
謀リ又僧侶ニ民事上ノ罰則ヲ施サンヲ謀リ又州郡  
ノ教正ニ王室理事官ノ爵位ヲ賜フヲ以テ州牧ノ權ヲ  
抑制センヲ謀リタリ然レ其ノ政略皆テ徒爲ニ屬  
シテ一モ其功ヲ奏セス殊ニ僧侶ノ力ハ以テ大勢ノ既  
ニ去ルヲ挽回スルニ足ラサルノミナラス一ノ大禍ヲ  
生シテ終ニ國家ノ滅亡ニ至テ止メリ

第二十四回 自主民ニ封田ヲ受領セシメタル  
事

跡ニ記セルカ如ク州牧ハ自主民ヲ率井地頭ハ封臣ヲ  
率井テ各々兵役ニ服事スルニ依リテ國中ノ諸族互ニ

相制シテ彼此勢力ノ權衡ヲ持セリ而シテ王室ニ直隸セ  
ル封臣ハ各自ニ所屬ノ陪臣ヲ使用スト雖モ其ノ身ハ  
ハ必竟自主民ノ外ナラサレハ亦タ州牧ノ權ヲ以テ約  
束セララルヘキナリ

其初ノ自主民ハ封田ヲ受領スルカ爲メ主從ノ盟約ヲ  
爲スト能ハサリシカ歲月ノ經過ニ從テ遂ニ其ノ許容  
ヲ得タリ此ノ變革ハ蓋シゴントラム王ヨリ甲列曼帝  
ニ至ル間ニ釀成スル所ニシテ之ヲゴントラム、チルデ  
ベル、及ビブルシチルド諸王ノ簽印セルアンデレーノ  
盟約ト甲列曼及ビ路易第一世カ其ノ諸子ニ版圖ヲ分  
領セシメタル約書トヲ比較シテ證明ス可シ右三回ノ

盟書中ニアル封臣ニ係ル規則ハ同一ノ時勢ニ處テ同  
一ノ事ヲ約定セシモノナルガ故ニ皆ナ大同小異ニシ  
テ其ノ精神文詞モ齊シク相類似スルナリ  
然レモ自主民ノ分限ニ係リテハ大ニ全シカラスアン  
デレ一ノ盟約ニハ自主民カ封田ノ爲ノニ主從ノ盟約  
ヲ結フ一ヲ掲ケサレモ甲列曼及ヒ路易第一世ノ分地  
約書中ニハ自主民ニモ之ヲ許容スル明文アルヲ看出  
セリ以テ此ノ新例ハアンデレ一ノ盟約後ニ認可セラ  
レタル所ニシテ自主民カ重要ナル特准ヲ受用スルノ  
嚆矢ト爲ルヲ知ルニ足レリ  
此ノ新例ハチャールス、マルテルガ寺領ヲ奪取シテ之

ヲ兵士ニ分配シ其ノ一部ヲ封田ト爲シ一部ヲ私有地  
ト爲シテ所有セシメ因テ以テ封建制ヲ一變セシハニ  
肇マリテ既ニ封土ヲ受領スル貴族ハ新タナル賜田ヲ  
私有地トシテ所有スルヲ利益トナシ自主民ハ之ヲ封  
田トシテ受領スルヲ榮譽ナリト認メシニ由ルナルベ  
シ

第二十五回 第二朝王室ノ陵夷セル原因、私有  
地ノ變更

前ニ記スルカ如ク甲列曼帝ハ其ノ版圖ヲ三子ニ分領  
セシムル時ニ遺令シテ向後各王ニ屬スル所ノ封臣ハ  
必ス我カ主公ノ疆内ニ於テ封田ヲ受領ス可ク決シテ

疆外ニ於テスルヲ許サス但シ私有地ニ至テハ疆ノ内  
外ヲ論セス隨意ニ所有スルヲ得ヘシ且ツ主公ノ死後  
各自主民ハ三國ノ中ニテ我カ好ム所ノ君王ト主從ノ  
盟約ヲ修メ得ルヲ宛モ從來曾テ主公ナキモノ、如ク  
ナルヘシト定メタリ八百十八年ニ路易王第一世ノ版  
圖ヲ諸子ニ分領セシメシ時ニモ全ク此規則ニ遵從セ  
リ  
自主民ハ其ノ受領スル封田ノ爲メニ主公ト主從ノ盟  
約ヲ爲スト雖モ私有地ノ爲メニハ一定ノ租税ヲ州牧  
ニ納メ且私有地四區ニ就テ一丁ヲ出シテ兵役ニ服事  
セシムルカ故ニ州牧ノ兵權ハ依然トシテ更ニ削弱サ

ル、一無ク而シテ年久シク弊生スルニ及テ再ヒ之カ改  
革ヲ爲セリ甲列曼帝伊太利王百賓ノ憲法ヲ見ル可シ  
史家ノ論ニフオンテ子イノ一戰ヲ以テ王國瓦解ノ主  
因ト爲スハ實ニ其言ノ如シ然レモ復タ之ヨリ生スル  
不幸、效果ニモ着眼セサル可ラス  
此ノ一戰ノ後ニ魯達利路易甲列ノ兄弟三人直ニ善後  
ノ盟約ヲ締ヒタリ其中ニ佛國政府ノ全体ヲ變更スヘ  
キ條款アルヲ見ルヘシ

甲列ハ乃チ右盟約中ニテ人民ノ分限ニ係ル條款ヲ布  
告シテ曰ク自主民ハ各其好ム所ニ從テ王侯貴族ノ中  
ヨリ我カ主公ヲ撰定スルヲ得ヘシト蓋シ此ノ盟約以



前ニ於テハ自主民ハ唯タ封田ヲ受領スルカ爲ノニ主  
公ニ臣禮ヲ修メタレト私有地ノ如キハ全ク王室ニ直  
隸シテ州牧ノ管轄ニ屬セシカ以後自主民ハ皆ナ其ノ  
私有地ヲ王侯貴族ヨリ受領スル封田ト變換スルノ權  
アリテ宛モ隨意ニ民政ノ範圍ヲ脫シテ封建ノ保護ヲ  
受ルノ自由ヲ得ルカ如シ

第一斯ノ如ク各自主民ハ隨意ニ王侯貴族ヲ選テ我カ  
主公ト定メ得ルヲ以テ從來王權ニ直隸シテ州牧ノ管  
下ニ在ル所ノ人民モ知ラス識ラス一變シテ他人ノ封臣ト爲レリ  
第二若シ一人アリ其ノ所有セル永世ノ私有地ヲ變シ  
テ封田ト爲スニアレハ右新受ノ封田ハ直ニ世襲ノモ

トナリ其身一代ニ止マラス之ヲ世襲封田ノ濫觴ナ  
リトス即チ締盟三王ノ一人ナル甲列ノ措置是レナリ  
三王締盟ノ後各王國ノ自主民カ隨意ニ主公ヲ選定ス  
ヘキ自由權ハ爾來制定スル所ノ法例ヲ以テ之ヲ確定シタリ  
甲列曼帝ノ治世ニ在リテ若シ封臣タルモノ一金ノ微  
ト雖モ主公ノ賜物ヲ得ル以上ハ決シテ封臣ノ籍ヲ脫  
ス可ラサル制度ナリシカ甲列ニ及テ凡テ臣屬タルモノ  
ノ、利害好惡ニ任セテ去就ヲ決シ毫モ咎メサル而已  
ナラス該王ノ趣意ハ務メテ從來ノ束縛ヲ解テ此ノ自  
由權ヲ享受セシムルニ在リ甲列曼帝ノ時ニ食田ハ身ニ屬シテ家  
ニ屬セサルモ後世ニハ家ニ屬シテ身ニ屬セサルト爲レリ

第二十六回 封田變更

封田ノ變更モ亦タ私有地ニ於ルニ異ナラス百賔ノ治世  
即チ七百五十七年ノ集會法例ヲ閱スレハ凡ソ國王ヨ  
リ食田ヲ受領スル者ハ其中ノ幾部ヲ割テ之ヲ數人ノ  
陪隸ニ與フレバ而モ全部ハ依然トシテ受封主ノ所有  
ニ属スレハ國王ヨリ全部ヲ収還サル、キニハ其ノ陪  
隸ニ與ヘタル所ノ部分モ齊シク収還サル、カ故ニ若  
シ封臣死亡スレハ陪隸モ俱ニ從テ土地ヲ失セサルヲ  
得ス若シ其ノ土地新タニ他人ノ食田ト爲ルキハ亦タ  
之ヲ陪隸ニ割與スルヲ前ノ如シ蓋シ封田ニ從テ浮沉  
ヲ俱ニスルハ陪隸ノ身ニシテ割與サレタル土地ニ非

サルヲ以テ永世封臣ニ属セサルノ陪隸ト封田ノ一部  
タル割與ノ土地トハ皆ナ國王ニ歸セサル可ラス  
世襲封田ノ制未タ確立セス國王隨意ニ之ヲ與奪シ或  
ハ終身ヲ限リテ之ヲ受領セシムル間ハ陪隸ノ分限大  
概斯ノ如シ而ソソノ封田ヲ嗣子ニ継カシメ陪隸モ之  
ニ倣フテ兼襲スルニ至テ旧制一變シ從來王室ニ直隸  
セシ所ノ土地モ以後ハ間接ノ所有ト爲リテ宛モ君權  
却退シテ地主ノ間ニ數層ノ隔障ヲ設ルカ如シ  
封田志ニ曰ク直隸ノ封臣ハ我カ封田ヲ陪隸ノ土地ト  
爲シテ之ヲ國王ニ割與スルヲ得ルト雖モ陪隸ハ再ヒ  
之ヲ他人ニ割與シ能ハサルヲ以テ封臣ハ何時ニ於テ

モ其ノ付與シタル土地ヲ収復スルヲ得ヘク且如是割  
與シタル土地ハ之ヲ封建ノ制度ニ適當スルモノト兼  
認セサルカ故ニ一般ノ封田ノ如ク子孫ニ之ヲ襲襲セ  
シメス

米蘭ノ元老議貢カ該志ヲ著述セル時代ノ陪隸法ト百  
賓時代ノ陪隸法トヲ比較シテ其ノ沿革ヲ觀察スルキ  
ハ陪隸法ノ却テ封田ヨリモ當初創立ノ性質ヲ保存ス  
ルヲ知ルヘシ

然レ氏該志著述ノ時ニ方リテ既ニ多少ノ變則特例ヲ  
生シテ立法ノ本意ヲ遺失セリ故ニ陪隸ト雖凡若シ羅  
馬征伐ノ官軍ニ從フキハソノ恩賞トシテ直隸封臣ノ

特典ヲ受領シ或ハ若シ封田ヲ得シカ爲メニ陪隸ニ金  
ヲ與フキハ之ヲ返還セサル間ハ其ノ土地ヲ収復スル  
ヲ得ス之ヲ嗣子ニ相續セシムルモ亦止ムルヲ得ス要  
スルニ米蘭ノ元老院ニ於テハ既ニ全ク封建ノ制度ヲ  
廢止セリ

第二十七回 其他封田ノ變更

甲列曼帝ノ治世ニハ受封ノ臣ハ必ス軍事ノ會議ニ出  
席セサル可ラス若シ違背スル者ハ何等ノ辭柄アルモ  
之ヲ嚴罰ニ處シテ許サス若シ州牧ニ於テ之ヲ容赦ス  
ルキハ其人ニ代リテ州牧自ラ罰典ニ坐セサルヲ得ス  
然ルニ三王ノ會盟ニ於テ特ニ之ヲ改正シテ貴族カ王

室ノ束縛ニ苦シムヲ弛ノ苟クモ一國防戰ノ軍事ニ非サルヨリハ兵役ニ服事スルヲ要セス或ハ主公ニ從テ行軍シ或ハ自家ノ事務ヲ辦理スル等都テ本人ノ自由ニ放任シ後五年ヲ經テ佛王甲列日王路易ノ兄弟再ヒ會盟シテ若シ兩國ノ間ニ兵端ヲ開クルヲアルモ必スシモ諸封臣ヲシテ兵役ニ服事セシムルヲ要セサル旨ヲ契約シテ兩君ハ勿論三軍ノ兵士ニ至ルマテ皆ナ誓詞ヲ立テ之ヲ確定シタリ

十萬ノ佛人、フオンテ子イノ一戰ニ陣亡シタルヲ目撃スルヨリ自餘ノ貴族皆ナ以爲ラク如斯ハ一族ノ肝腦ヲ擧テ徒ヲニ國王カ一己ノ得合ヲ爭フ私闘ノ犧牲ニ

供スルニ過キス國中ノ貴胄名族滅絶シテ子遺ナキニ至ラサレハ國王ノ雄心ハ死セサルナリト於是苟クモ外寇ノ警アリテ國土ヲ防禦スル時ニ非サルヨリハ貴族ハ決シテ兵役ニ就カサル可シトノ法律ヲ制定シテ數百年ノ間之ヲ遵守スルニ至レリ

第廿八回 佛國ノ大吏及ヒ諸封田ノ變遷

特殊ノ事情アルニ依リテ特殊ノ法則ヲ生シ殆ト封田ノ面目ヲ一變シ其ノ影響ハ遠近ニ波及シテ忽チ全國ノ制度頽壞セリ但ニ國初ニ於テモ世襲ノ封田ヲ賜フニ無キニ非スト雖ハ全ク一時ノ特例ニ過キス其他ハ定則ヲ守リテ失ハサルカ故ニ王室ハ之ヲ彼ニ取リテ

此ニ與ヘテ更ニ損失ヲ被ムルヲ無ク又樞要ノ官職ヲ子孫ニ兼襲セシメシヲ无シ

然ルニ禿王甲列ニ至テ要職封田ノ二者齊シク世襲ノモノト爲レリ其ノ法例ニ據レハ牧守タル者ノ子孫ニ父祖ノ州郡ヲ除授シテ其職ヲ嗣カシメ之ヲ推シテ封田ノ制ニ及ヒ從來封臣ハ大抵王室ニ直隸セシカ此時ヨリ間接ニ關係ヲ有スルヲト爲リ從來州牧ハ國王ノ法院ニ坐シテ訴訟ヲ裁判シ自主民ヲ率井テ戰地ニ赴キシカ此時ヨリ君民ノ間ニ介立スルヲト爲リテ王權ハ遂ニ壅蔽セラレテ人民ニ直達セス此規則益擴張スルニ從テ顯職封田ノ操縱ハ益王室ノ掌握ヲ離レ去レ

リ

又諸ノ法例ニ據レハ州牧ハ州内ニ附屬ノ食田ヲ賜ヒ管下ノ封臣ハ皆ナ王室ノ直隸タリシカ此州牧漸ク世襲ノ官職タルニ及テ封臣ハ陪隸ト爲リ食田ハ世襲ノ官ト爲リテ州牧ノ威權日ニ增長セリ

故ニ第二朝ノ李世ニ方リテ朝廷式微ノ狀況如何ヲ確知セント欲セハ姑ラク眼ヲ第三朝ノ初二注キテ大邑ヲ領セル侯伯カ陪隸ノ甚タ過多ナルニ苦シムヲ觀テ察知ス可シ

若シ兄ヨリ若干ノ領地ヲ割テ弟ニ與フハ弟ハ兄ノ封臣タルヲ以テ右領地ハ乃チ主公ニ對シテ陪隸ノ土

地ト爲ル是レ王國ノ慣習法ナリ不爾根フ井リツプ、オ  
ルクストス及ヒ子フェルスブーロン子セントホール、  
ダムビーレノ諸侯伯議定シテ嗣後承襲其他ノ事故ヲ  
以テ分裂セル封田ハ本文ノ別ニ拘ラス都テ一主公ニ  
直隸ス可シト布告セリ然レ其功令普及ノ效ナキ當時  
ニ在リテハ一般ニ之ヲ遵奉スルモノ無ク唯ク慣習法  
ノ作用ニ依リテ稍々之ヲ整理セシノミ

第廿九回 禿王甲列即位以來ノ諸封田ノ性質  
ヲ論ス

禿王甲列ノ切令ニ曰ク若シ顯職ニ任シ或ハ封田ヲ領  
スルモノ子ヲ遺シテ死スルキハ右顯職或ハ封田ハ其

子ニ承襲セシム可シト此ノ切令ニ由テ生スル弊害ノ  
進度ト各國ニ於テ之ヲ擴張シタル進度トヲ確知スル  
ハ極メテ難事ナリ又封田志ニ據レハコンラット帝第  
二世ノ初ニ疆内ノ諸封田ハ之ヲ受領者ノ嫡孫ニ傳ヘ  
ス主公ヨリ諸子ノ中一人ヲ選テ承襲セシメ稍々選立  
ノ狀ヲ現セリ

第二朝ノ王位ハ一面ヨリ觀レハ選立ノ狀アリ又一面  
ヨリ觀レハ世襲ノ体アルノ所以ハ既ニ第十七回ニ説  
明スル如ク常ニ王位ヲ一姓ニ定メテ子孫ニ相續セシ  
ムルカ故ニ世襲ノ体アリ人民ノ公撰ニ依リテ諸子ノ  
中ヨリ一人ヲ推舉スルカ故選立ノ体アリ夫レ同性ノ

事物ハ必ス一様ニ運行シ而ノ一ノ政法ハ斷エス他ノ  
政法ニ映響スルヲ以テ王位相續ノ法理ハ復タ封田承  
襲法ノ倣フ所ト爲リテ諸子ノ中一人ヲ選テ封田ヲ相  
續セシノ終ニハ各封田皆ナ王位ト其揆ヲ一ニシテ選  
立世襲ノ体ヲ兼タリ  
主公ノ身ニ選立ノ權ヲ有スルハ該志編述ノ時即チ  
フレデリツキ帝第二世ノ以後ニ起レリ

第三十回 全上

封田志ニ曰クコンラツド帝羅馬ニ進發セシ時從軍ノ  
貴族上疏シテ從來封田相續ノ唯タ諸子ニ止マルヲ改  
メテ諸孫ニモ承襲セシメ若シ兄弟ニシテ嫡子ナク死

去スルハ生存セルモノヲシテ父ノ遺封ヲ紹クヘキ  
法律ノ制定アランヲ請願シテ允可ヲ得タリ  
又曰ク該記者ハフレデリツキ帝第一世ト同時ナリ古  
ノ民法學士ハ常ニ封田ノ承襲法ハ傍系ニ於テ父方ノ  
從兄弟ニ止マリテ其他ニ及ハスト輓近ニテハ然ラス  
七等ノ遠親ニ及ヘリ又新定ノ法典ニ據レハ嫡系ニ於  
テハ數世ニ亘リテ際限無シ是レ冥々ノ中ニコンラツ  
ド帝ノ法律ヲ擴張シタルナリト  
都テ此等ノ事情ヲ推察シテ佛國史ヲ繙クハ一目ノ  
下ニ封田世襲制ノ設立カ目耳曼ニ於ルヨリモ佛國ニ  
於テハ更ニ早キヲ知ル可シ故ニコンラツド帝第二世

ノ踐祚ノ初メ即チ千零廿四年ノ日耳曼ノ國勢時情ハ  
全ク八百七十七年ニ殂セル禿王甲列ノ治世ト其趣ヲ  
同シクセリ然ルニ該王ノ没後ヨリ佛國ノ形勢大ニ變  
更シ遂ニ甲列王シムブルニ至テハ國力萎靡シテ外ハ  
日耳曼ニ對シテ我カ正統ノ帝冕ヲ爭フ能ハス内ハ  
權臣跋扈シテ王室式微ヲ極ノ一國ニ君臨スヘキ威權  
ヲ保ツ能ハサリキ  
禿王甲列ハ爲人暗弱ナレハ遂ニ映響ヲ國家ニ及ホシ  
テ王國ノ威權モ齊シク薄弱ヲ致セリ之ニ反シテ其ノ兄  
弟日耳曼王路易及ヒ嗣テ王位ヲ踐ムモノハ皆ナ有爲  
ノ令主タルヲ以テ政府鞏固ニシテ能ク威名ヲ數世ニ

保持シテ墜サハリキ

其故何ソヤ或ハ日耳曼人ハ氣質淡寧ニシテ心思輒ス  
ク變轉セサルカ故ニ佛蘭西人ノ如ク前後ヲ顧ミス輕  
躁ニ旧制ヲ改革シテ封田ヲ一家ニ世襲シムル等ノ措  
置ナキニ由ル乎

加之日耳曼ハ外寇ノ虞ナキヲ以テ絶テ佛蘭西ノ如ク  
那曼人撒拉人ノ兵禍ヲ被ムリテ城邑墟ト爲リ人烟跡  
ヲ絶ツノ慘狀ニ陷ラス况ヤ佛蘭西ニ比スレハ劫掠ス  
ヘキ富財饒多ナラス出没スヘキ海濱廣カラサル而已ナ  
ラス國中ニハ無數ノ沼澤縱横シテ進退ニ便ナラス山  
林星羅シテ徘徊ノ路ヲ妨クルニ於テヤ既ニ斯ノ如



ク封疆安全ニシテ外患ヲ慮ルニ足ラサルヲ以テ王室ハ自ラ封臣ノ助力ヲ要セス之ニ依頼スルヲ鮮ナキナリ若シ能ク日耳曼ノ諸帝ヲシテ羅馬ニ赴キテ冠禮ヲ行フヲ無ク伊太利征伐ノ師ヲ起スヲ無カラシノハ更ニ貴族ニ求ムル所ナキヲ以テ永ク封田ノ旧制存立シテ本来ノ主義ヲ失スルニ至ラサル可シ

第三十一回 甲列曼家ノ帝業他家ニ移リシ所以

甲列曼ノ帝國ハ禿王甲列ノ嫡統ヲ措キテ庶流ノ日耳曼王路易ニ傳ハリシカ九百十二年フランクニア侯コンラツドヲ選立スルニ及テ遂ニ他國ノ家系ニ移レリ

蓋シ當時佛國ノ王室ハ其力纔カニ二三ノ村邑ヲ制スルニ過キサレハ更ニ起テ堂々タル帝國ヲ争フヘキ勢カナク甲列王シムプルハコンラツド帝ノ嗣君顯理帝第一世ト相會シテ互ニ盟約ヲ結ヘリ所謂ボンヌノ盟約是レナリ兩君ハ舟ヲ萊厓河ノ中流ニ浮ヘテ相會シ向後悠久ノ信睦ヲ守ルヘキ旨ヲ誓ヘリ其時甲列ハ佛蘭西ノ西王ト稱シ顯理ハ東王ト稱シテ彼此俱ニ不偏ノ稱号ヲ呼ビ用井而ノ甲列ハ日耳曼王ノ名義ニ對シテ盟約ヲ締ヒテ其ノ帝号ヲ認ノサリキ

第廿二回 佛國ノ王冠ヒユー、カペット家ニ移シ所以

封田ノ制一變シテ世襲ノ所有ト爲リ陪隸ノ采地全國ニ徧予キニ至リ王政ノ作用全ク熄テ封建ノ治ヲ成シ從來王室ニ直隸セル無數ノ封臣ハ皆ナ二三ノ強大ナル侯伯ノ附庸ト爲リテ陪臣ノ列ニ入リ幾層ノ階級ヲ經サレハ王室ニ達セス君權下ニ傳フルノ際ニ或ハ壅滯シ或ハ消散シテ王政自ラ其ノ作用ヲ失セサルヲ得ス故ニ諸侯伯ハ躬ヲ王命ニ遵ハサル而已ナラス陪隸ヲ用井テ以テ偃蹇ヲ逞クスルノ爪牙ト爲シ朝廷ハ都テ直隸ノ州郡ヲ喪ヒ僅カニ殘ル所ノレイムス、ローンノ如キ畿甸ノ地ト雖凡亦タ全ク權臣ノ爲ノニ蠶食セラル、ヲ免レス譬ヘハ樹木ノ枝葉繁茂ニ過キテ本幹

却テ枯凋スルカ如シ是レ王冠ヲ有力ナル侯伯ノ一家ニ禪讓スルノ已ムヲ得サル所以ナリ

那曼人ノ入寇スルヤ小艇ニ駕シテ無數ノ河ロヲ溯リテ劫掠ヲ肆マ、ニシ沿岸ノ地方皆ヲ兵火ニ罹リタレ凡特リヲルリーンズ、巴黎ノ諸城ハヒューカペットノ封地ニ屬スルヲ以テ能ク賊兵ヲセーン河ロアル河ニ扼止シテ一艇ヲモ上流ニ進入セシメス全國人民ノ塗炭ニ陷ルヲ救ヘリ夫レ斯ノ如クヒューカペットハ一國ノ鎖鑰トモ謂フベキ城池ヲ守リテ藩屏ノ任ニ適當スルカ故ニ終ニ王位ヲ嗣テ政權ヲ掌握スルト爲レリ其後日耳曼ニ於テ封域正ニ突厥人ノ衝ニ當ルヲ以

テ帝國ヲ他ノ一家ニ譲リテ世襲ト爲セシモ全ク此ノ故智ニ倣フテナリ

王室陵夷シテ封田ノ世襲法確立スルニ方リテ帝國ハ甲列曼ノ家ヲ去リテ新朝ニ移レリ然ルニ全一ノ封建制ニシテ特リ日耳曼ノ帝位ノミ數世ノ間能ク選立ノ政体ヲ守テ改メサルハ蓋シ該國ニ封田世襲ノ制ヲ設ケシヲ適カニ佛國ノ後ニ在レハナリ之ニ及シテ佛國ニ於テハ王位ノ甲列曼家ヲ去ルキニハ封田王位ハ皆ナ既ニ世襲ノ所有ト爲レリ

然レハ二姓禪讓ノ前後ニ起ル所ノ一切ノ變革ヲ舉テ之ヲ悉ク鼎革ノ時ニ歸スルハ謬見ニシテ一國ノ事物

都テ旧觀ヲ改メタルハ蓋シ王家ノ革命ト及ヒ君權強鎮ニ移ルノ二事ニ由レリ

第廿三回 封田世襲ノ映響

封田一タヒ世襲ノモノト爲ルヨリ佛國ニ始メテ長子獨兼ノ權起レリ第一朝ノ世ニハ曾テ斯ノ權理アルヲ知ラス父ノ王位ハ勿論私有地ニ至ルマテ皆ナ兄弟ニテ分領シ封田ノ如キハ其ノ一時ノ受領ト終身ノモノトヲ問ハズ固ヨリ兼襲スベキニ非サルヲ以テ之ヲ分領スル等ノヲ絶テアラサリキ

第二朝ニ及テ路易第一世ハ帝號ヲ長子ロタリユスニ紹カシメ故ラニ其ノ位地ヲ崇メ諸弟ヲシテ敢テ抗禮

セシノス他國ノ王位ヲ有スルニ二弟ハ一年ニ一回入  
覲シテロタリユス帝ノ安否ヲ候フテ方物ヲ貢獻シ而  
ノ通常ノ政務モ亦タ帝ニ稟議スル後ニ非サレハ施行  
スルヲ得ス之カ爲メニロタリユスノ驕心ヲ增長シ  
ノテ種々ノ辭柄ヲ造爲シ終ニ國家ノ禍ヲ釀シタル原  
因トハナレリアゴバルドカ該帝ヲ擁戴スルヲ一周旋  
セシ時ノ書牘中ニ先帝ノ遺訓ト稱シテ三晝夜斷食ノ  
戒ヲ守リ神秘ノ祭典ヲ脩メテ上帝ニ祈禱セリ國民既  
ニ忠誠ノ義務ヲ誓言シタレハ之ニ背クモノハ自ラ偽  
誓ノ罪ヲ蒙ムラサル可ラス法主ノ認可ヲ得シカ爲メ  
ニ帝駕ヲ羅馬ニ進メテ帝國ノ寶位ヲ踐マシムルヲ主

張シテ唯タ書中ノ旨趣ヲ固執スルノミニテ更ニ長子  
獨兼ノ權ニ着眼セシヲ無シ其言ニ云ク先帝ノ趣意ハ  
實ニ帝國ノ土地ヲ諸兄弟ニ分領セシムルニ在レバ爾  
後一人ニ全授スルニ若カサルヲ發見シテ特ニ長子  
ヲ撰テ之ヲ與ヘタリト既ニ長子ヲ選テ之ヲ與フト明  
言スル以上ハ兄弟ノ中何人ニテモ選ミ與フ可シト謂  
フニ異ナラス全ク長子獨兼ノ權ニ關係セサルナリ  
然ルニ封田一タヒ世襲ト爲ルヤ否ヤ封田ノ兼襲法中  
忽チ長子獨兼ノ權ヲ設ケテ之ヲ封田ノ源頭タル王位  
ニ推及シ而シテ封田ニハ一定ノ課役アリ受領者必ス  
其ノ義務ニ任セサルヲ得ス於是長子獨兼ノ權愈確立

シテ搖カス封建ノ法理遂ニ政法民法ヲ超乘シテ諸子  
分領ノ古法律ハ地ヲ拂テ盡キタリ

封田、受領者ノ子孫ニ傳リテ兼襲スル所ト爲リテ地頭  
ハ自由ニ之ヲ他人ニ授與スルヲ能ハス於是其ノ損失  
ヲ償フヘキ一便法トシテ所謂收贖權ヲ創定シタリ此  
ノ代金ハ初ノ嫡系ヨリ納メ来リタレバ後ニハ唯タ旁  
系ニテ相續スルキニ限リテ之ヲ納ムヘキ慣習ト爲レ  
リ

未タ幾クナラス封田ヲ父祖傳來ノ家産トシテ外人ニ  
譲リ得ルヲト爲レリ是レ乃チ讓與課金ノ由テ起ル所  
以ニシテ殆ト國中一般ニ履行セリ此ノ權理ハ初ノ一

定ノ制限ナク時々地頭ノ隨意ニ出タレバ後ニ讓與ノ  
處分普通ノ習慣ト爲ルニ及テ各州郡ニ於テ金額ヲ制  
定シタリ

收贖權即チ封田返納ノ代金ハ相續人ノ變更スル毎ニ  
必ス納ムヘキモノニシテ初ノハ嫡子ノ兼襲ニ於テモ  
之ヲ免カル、ヲ得ス其ノ金額ハ土地一年ノ收入ヲ以  
テ通例トシタレバ右金額ニテハ封臣ノ負擔重キニ過  
キテ自ラ封田ニ影響シテ損害少ナカラサルニ依リ主  
從ノ盟約ヲ結フ時ニ地頭ヨリ往々收贖權ノ代金ヲ定  
メテ以後更ニ増額セザル旨ヲ約定シタルヲアリ然レ  
バ邇來金價益下落スルカ爲メニ其ノ金額ハ極メテ輕

少ニシテ論スルニ足ラス今日ニ至テ收贖權ハ有名無實ノ義務ニシテ特リ讓與ノ課金ノミ十分ニ其ノ作用ヲ存セリ然ル所以ノモノハ他ナシ讓與ノ課金ハ封臣或ハ其ノ嗣子ニ關係セズ全ク預期セザル處ノ授受ニ就テ價值ノ若干ヲ收納スレハナリ

封田ノ受領本人ノ終身ニ止マル間ハ曾テ其ノ一部ヲ割テ陪臣ニ與ヘ之ヲ永久ニ所持セシムル能ハス蓋シ物件ヨリ生スル所ノ収益ノミヲ享有スル人ニシテ其ノ根元タル物件ヲ他人ニ讓與スヘキ理由決シテアル可ラサレバナリ然レ氏封田世襲ノ制一定スルニ及テハ當時ノ習慣ニ因テ一二ノ制限ヲ加フ而已ニテ之ヲ

分割シテ陪隸ニ與フヲ許サレタリ

封田ヲ永世ニ受領シ收贖權ヲ設立スルニ及テ若シ之ヲ襲フヘキ男子アラサレハ地頭ニ於テ女子ニ右封田ヲ兼襲セシノテ二倍ノ收贖權即チ代金ヲ收納セリ二倍トハ兼襲ノ時ニ相續ノ女子ヨリ取ルモノト其後入夫スル氏ニ其婿ヨリ妻ト同額ノ代金ヲ取ルヲ謂フ然レ氏國王ノ大位ノ如キハ無上ノ基業ニシテ之ヲ何人ヨリモ受領スルニ非サルヲ以テ更ニ收贖權ヲ要スルモノ無シ

シールース伯ウイルリヤム第五世ノ女ハ父ノ爵位ヲ承襲セザリシカ氏エリアノルハアクイタインヲ嗣キ

又マテルデ井スハノルマンダーヲ嗣キタリ當時女子ノ承襲權既ニ全ク確立シテ一般ノ成規ト爲リシハル  
ーイ、デ、ヨングカエリアノルト離婚ノ後直チニグエン  
ナヲ返納シテ更ニ故障ナキヲ見テ知ル可シ然レ氏此  
ノ成例ニ續テアク井タシ、ノルマンデ井一ニ州ノ承襲  
アルニ據リテ之ヲ察スレハ女子ヲシテ封田ヲ承襲セ  
シムハキ法律ノツールース州ニ行ハレクルハ蓋シ自  
餘ノ州郡ヨリ迥ニ後ニ在ル可シ  
歐土諸邦ノ憲法ハ概子建國ノ際ニ慣行セル封建制ニ  
因循シテ制定スル所ニ係ルカ故ニ佛國ニ於テ女子ヲ  
シテ國王ノ位ヲ踐マシノス又帝号ヲ襲ハシメザルハ

當時ノ國制、女子ニ封田承襲ノ資格ヲ與ヘサレハナリ  
然レ氏封田世襲ノ制相定マル後ニ建國セル那曼人或  
ハムール河畔ナル諸王國ノ如キ處ニ於テハ女子ニ承  
襲權ヲ所有セシムルモノ尠ナカラス其他日耳曼ノ境  
外ニ在ルモノ及ヒ其後基督教ノ宣布ニ由テ再ヒ建國  
ノ狀ヲ爲スモノ、如キ亦タ然リトス  
地頭ノ隨意ニテ封田ヲ授與セシ頃ハ封田相當ノ義務  
ニ任シ得可キ人ヲ撰テ授與シタルカ故ニ曾テ之ヲ未  
成丁ノ者ニ授與セシヲ無シ然レハ封田一變シテ世襲  
ノ制ト爲ルニ及テ地頭ハ我カ收益ヲ増加シ若クハ幼  
年ノ封臣ニ武技ヲ練習セシモンカ爲ノニ其ノ丁年ニ

達スルマテ親ラ封田ヲ管理シタリ我が習慣法ニ所謂  
貴族子弟ノ後見職是レナリ右後見職ハ羅馬法ノ師傅  
ト全クソノ主義ヲ異ニスル者ナレハ決シテ全一ノ觀  
ヲ作ス可ラス  
封田終身ノ受領ニ止マル時ニハ受領者ハ通例其ノ爲  
メニ忠誠ヲ竭スヘキ誓詞ヲ爲シ地頭ハ手ニ執ル所ノ  
筋ヲ舉テ之ヲ實授スルヲ表示スルヲ猶ホ今日主從  
ノ禮ヲ行フテ之ヲ保証スルガ如シ然レモ州牧或ハ國  
王ノ理事官カ州郡ニ於テ主從ノ禮ヲ執行セシヲ見  
ス

(原註)ホノ一ダ即チ主從ノ盟約トナサールチ即チ

忠勤ノ誓詞トハ之ヲ執行スル禮式同シカラス主從  
ノ盟ヲ結フハニハ封臣跪テ地頭ノ手ヲ握リテ誓詞  
ヲ爲シ忠勤ノ誓詞ニハ立ナカラ聖經ヲ捧ケテ誓言  
スルノミ又地頭ニ非サレハ決シテ主從ノ盟ヲ要求  
スルヲ得ス

又現存ノ集會法例中ニ官吏ノ職務ヲ以テ之ヲ執行ス  
ルヲ見ズ但シ時トシテ州牧及ビ國王ノ理事官ハ王室  
ノ臣屬ヲ召集シテ忠誠ノ誓詞ヲ要取シタルヲアレモ  
全ク一時ノ虛禮具文ニシテ其實ナク之ヲ後來主從ノ  
盟約ト稱スルモノニ比スレハソノ性質ヲ殊ニセリ  
若シ州牧及ビ國王ノ理事官ニ於テ封臣ノ忠誠ヲ疑フ



「ア」レハ「フ」イルミタスト稱スル保証ヲ立テシメタリ  
然レ氏之ヲ以テ主従ノ盟約ト看做ス可ラス

「ア」ツボットシユセルノ著述ナルダゴベール王ノ寶椅  
記ニハ考古ノ證ヲ援テ佛國ノ諸王ハ常ニ之ニ坐シテ  
以テ貴族ノ臣禮ヲ受ケタリト言フト雖氏氏ノ説ハ唯  
タ其時ノ思想文辭ヲ述フルニ過キス封田紹續ノ時ニ  
地頭ヨリ臣屬タルノ認可ヲ得ルハ最初ハ一時ノ制  
規ナリシカ終ニ一定ノ義務ト爲レリ右認可ハ乃チ主  
従互ニ竭スヘキノ義務ヲ恒久ニ記銘ス可キ大典ナル  
ガ故ニ其ノ禮儀極ノテ嚴重ナリ

主従ノ盟約ハ蓋シ百賓王ノ治世ニ始メテ世襲ノ土地

ヲ賜與セル時ニ濫觴セシナル可シ是レ予カ臆説ニア  
ラス抑モ佛朗克人ノ古事紀ヲ作りシ人ハ固ヨリ彼ノ  
無學ナル虚説ノ如ク我カ時世ノ風俗ニ依リテ巴威里  
亞公タシルロンガ百賓王ニ忠誠ノ誓ヲ爲ス等ノ比ニ  
アラスト推測スルヲ以テナリ

第廿四回 同上

封田ノ與奪ハ地頭ノ隨意ニ在リ或ハ之ヲ賜與スルモ  
畢生ノ有ニ止マル間ハ專ラ政法ノミニ關涉セシカ故  
ニ當時ノ民法ニ封田ノ規律ヲ記スル甚タ稀ナリ然ル  
ニ世襲ノ基業ト爲リ而モ受授買賣ノ自由ヲ得ルニ及  
テハ均シク政法民法ニ關涉セサルヲ得マ何トナレハ

封田ニ兵役ノ義務ヲ兼帶スト觀ルキハ之ヲ政法ニ屬セサル可ラス之ヲ受授買賣スヘキ財産ノ一種ト觀ルキハ民法ニ屬セサル可ラス是レ封田借有ノ規則ヲ民法上ニ生スル所以ナリ

封田世襲ノ制ト爲ルニ從テ其ノ兼襲法モ亦タ世襲ノ精神ヲ含テ制定セサル可ラス故ニ佛國ノ法律ハ羅馬撤利ノ法理ニ反シテ尊屬ノ人ニ卑屬ノ遺業ヲ紹續セシノス蓋シ封田ヲ受領スル者ハ必ス相當ノ義務ヲ竭サ、ルヲ得サレハ若シ尊屬ノ祖父或ハ曾伯叔ノ如キ極老ノ人ニ之ヲ紹續セシムルキハ其ノ服役ニ堪フルヲ望ム可ラサレハナリ此ノ法律ハブーチルリールノ

説ノ如ク金ク封田ノ受領ヨリ成立スルモノナリ

封田世襲ノ制ト爲ルニ及テ地頭ハ封臣カ果シテ應分ノ義務ヲ竭スヤ否ヤヲ監督シ而ノ又封田兼襲ノ女子(時トシテハ男子)ハ地頭ノ兼諾ヲ得ザレバ婚姻ヲ結ブ可ラズト主張セシヨリ貴族結婚ノ契約ハ封建制ト民法ノ二者ニ跨ルニ至レリ故ニ如是地頭ノ監督權ヲ以テ相續人ヲシテ封田ノ義務ヲ竭サシムルニ適當ナル兼襲法ヲ制定セタリ故ニ最初ハ貴族ニ非サルヨリハ結婚ニ依リテ自由ニ基業兼襲ノ處分ヲ爲シ能ハザルトボイエル、ネトフレリエー、論タル所、如シ

親族ノ名義ニ淵源セル收贖權ハ封田既ニ世襲ノ制ト

何止  
龍  
片

發兌 書林